

# 西秩父における町形成と商業の展開

— 近世・近代の小鹿野町を事例として —

岡 村 治・川崎 俊郎

## I はじめに

秩父盆地には、荒川とその支流である赤平川などが開析した河岸段丘が発達している。盆地内中央を南西から北東にのびる尾田蔭丘陵は、荒川・赤平川の分水界をなし、秩父盆地を北西部の西秩父と南東部の東秩父とに分けている。このうち、赤平川左岸の広い段丘平坦面に市街地が立地する小鹿野町は、東西約800mにおよぶ町並みに多くの商店や行政機関が集積し、西秩父における中心地として位置づけられる。

小鹿野の町の成立は古く、近世初頭に町場が形成され、あわせて市立てがされたという伝承をもつ。小鹿野は、志賀坂峠や矢久峠を越えて上州や信州につながる交通の要所にあり、また、赤平川支流の上流谷筋を後背地に含めた谷口集落的性格を有していた。そのため、小鹿野の六斎市は明治期にいたるまで続き、西秩父の物資の集散に重要な機能をはたした。さらに、月に6回、5・10の付く日を市日とした小鹿野の市は、大宮郷(1・6)、本野上(2・7)、費川(2・7)、下吉田(3・8)、大野原(4・9)の市とともに、秩父盆地における定期市場網の一角を形成していたとされる<sup>1)</sup>。

近代の秩父盆地においては、秩父銘仙や秩父セメントに代表されるような産業基盤が確立されていったが、その過程で秩父市は盆地全域を統括する高次の中心地に成長した。一方、小鹿野町は西秩父の中心であり続けたものの、両者の較差は漸次拡大する傾向にあった。

こうした盆地内の地域構造はどのように形作られ、また歴史的にどう変容してきたのであろうか。そこで、本稿は、西秩父の中心地としての小鹿野町を対象に、近世初頭から昭和初期にいたる町の変容を明らかにすることを目的とした。

一般に、重層的に形作られる地域構造にあって、町は、地域の核として後背地と結びつき、また地域間を繋げる結節点として基本的に性格づけられる。したがって、町には後背地に起きた変化と、地域外からもたらされる変化の、両方向からの変化が集積され、同時に拡散される。この意味において、本稿は、町に凝縮された地域変化の歴史的堆積を、とくに商業的機能の検討を通じて再構築する試みをも意図している。

## II 近世初期の小鹿野の町立て

### 1) 小鹿野の村落景観

近世初期の小鹿野にはどのような村落景観が展開していたのであろうか。慶安5年(1652、承応元年に改元)の「小鹿野上郷御検地水帳」<sup>2)</sup>記載の字附地名を手がかりに作成したのが第1図である。

上小鹿野村の土地利用の基本的構成は、標高380m程度の丘陵地山麓に小集落と畑地、下位段丘面に発達した段丘上自然堤防の上には町場と畑地、そしてそれらの間の、いわゆる後背湿地には水田が展開していた。

段丘面は、赤平川上流の北西から下流の東南方向にむけてわずかながら緩く傾斜しているため、後背湿地も東南部にむけて発達しており、水田の利用も旧下小鹿野村との村境付近で最大を示していた。昭和のはじめに小鹿野用水が完成するまでは、この水田への灌漑用水は主に丘陵山麓から引く沢水と、水田面に湧出する湧水とに依存していた。そのため、灌漑用水が絶対量において不足することが多々あったらしく、水田は「動もすれば干損の患」<sup>3)</sup>であった。村内西北にある「堤ノ上」という地名は、沢水をせき止めた灌漑溜池が築造





小鹿野の村落景観

父郡小鹿野上郷検地永帳」および聞き  
町役場「明治21年地籍図」より作成

八反田などの水田は、長地条の地割を集めて方格状に区画されており、その1辺が平均110.6mであることから条里制遺構と考えられている。したがって、これら後背湿地の水田開発はかなり古い時代に遡ることができる。

段丘上自然堤防は、近世初頭に町が建設されるまでは、内手、田端、新井などに3～6戸の家か

らなる小村が存在したほかは、畑地ないし原野に利用されていた。それは、いわふ原、笠原、諏訪原、清水原など、語尾に原を付する地名が分布することから推定される。そして、赤平川をはさんで南に急峻な山があるため、この場所は、とくに冬期間は日照時間が少なく日陰になる部分が多い。また、土地は砂礫質からなるため、水はけは

よいが地味はよくない。そのため、ここの畑地は主穀生産に適さず、ごく近年まで桑畑が卓越していた<sup>5)</sup>。

丘陵地山麓面は、いくつかの小村と地味の豊かな畑地から構成されていた。これらの集落や畑地は、水田同様、古くに開発されていたことは容易に肯首されよう。山麓緩斜面の集落は、太陽高度が低くなる冬期間でも、耕、宅地とも日陰になることなく、また、日没後は気温の逆転層が生じるため町場に比べると幾分暖かいという。また、乾干時を除けば、斜面崩壊土壌からなる真土は主穀生産に適していた。慶安検地においても上々畑や上畑など、等級の高い畑地が卓越していた。

山麓面に分布する宗教施設に関連するいくつかの地名は、かつて、土豪の人物を中心としてこれらの小村が発達したことを物語っている。たとえば、諏訪神社はもと大久保にあって、寛永4年(1627)に村鎮守として現在地へ移転された。「小鹿野古老覚書」<sup>6)</sup>によれば、「一、當村惣社諏訪明神大久保將監願主にて勧請仕候社内御除地なり。依之二月廿七日祭禮の有之今に大久保氏相勤候也。」とあるように、社人的性格をもった大久保將監なる人物の存在が注目される。さらに、社人としての將監を裏付ける記述として、岩田家文書に含まれる「小鹿野町由緒書」<sup>7)</sup>には、「諏訪明神大久保始メ祭故に今に祭禮日に上下にて櫛を持、御輿先に立、(中略)時ノ名主並に岩田へ立寄、一礼有テ通ルなり。是古礼なり。」とある。近世初期の小鹿野にあって数少ない武士の名前を有した大久保將監は、慶安検地の段階でも大久保に屋敷を持ち、かなりの田畑を保有していた。「古老覚書」に記された伝承に、「大久保將監は西の澤より東の澤迄持分也。後に百姓にわけ出す」というくだりも、彼が旧く土豪の性格を有していたことを物語っている。

字高田、子の神、籠関の付近には、「勝圓寺」をはじめ、「とうのまへ」や「せんたな」といった宗教的地名が分布している。勝圓寺は分郷によって下小鹿野村分となった寺で、現在の曹洞宗正永寺である。隣接してその末寺に、梅正寺とい

う庵があった。

他方、諏訪社のやや西、字別所には「らんとう」、「どうのそり」といった寺院に由来する地名が分布している。別所には、町に移動する前の十輪寺があった。十輪坊と呼ばれた当時は天台修験の寺で、北条氏直の御祈祷所として大伽藍を備えたという。しかし、武田軍の侵攻や鉢形北条氏の滅亡などによって大破し、慶安検地の時点では、室町時代の作と伝える木造金剛力士立像と、地藏堂だけが別所に残った。そのほか、「かちや」および「かちやの前」「かちやうら」という耕地の存在は、鍛冶職人が近世以前から在住していたことを表している。

このように、古くに開発された山麓面および段丘上自然堤防に立地した小村は、それぞれが大久保氏などの小土豪や修験寺院を中心に成り立っていた。慶安期にいたってなお、村内の耕地に同一地名を有していた事実は、前時代のそうした土地占拠の名残であろう。これら小土豪や修験寺院は、近世初頭、鉢形落城や小鹿野の町立てとともに、あるものは退転し、あるものは町屋敷へ移動するなどして、村落景観は大きく再編成され、近世的な村落秩序が形成されることになった。

## 2) 小鹿野の町立と形態

徳川氏の関東入封以後、直轄地の支配にあたった代官らは各地に代官陣屋を設けた。秩父地方における初期の代官陣屋所在地は明確にはされていないが、その一つが小鹿野に設けられた。当初、代官は在地支配を行ったため、そうした代官陣屋の設置にともなって新しく町が建設され、あわせて市も設立された。そうした事例は、特に関東西部の町に多く認められる。小鹿野の町立て年次は、西秩父地方で慶長3年(1598)に検地が行われたこと、後述するように、慶長4年(1599)に市立てがなされたことから、その直前の慶長初年に求められよう。この時、上町・中町・下町の町割り<sup>8)</sup>が縄張りされ、町場の原型が形作られた。その後、慶安・承応期にいたる50余年間に、陣屋を移転し寺社を勧請するなどして、町の形態は段階的に整

備された。

慶安5年(1652)9月に作成された屋敷検地帳<sup>9)</sup>からは、近世小鹿野の町场景観の基本的構成を窺うことができる。町には合計57筆、面積にして2町2反20歩の屋敷があった。いま、これら町屋敷の間口だけを合計してみると554.5間になる。したがって、町並みはその半分である277.25間、すなわち約500mが東西の長さとなる。これを明治期の地籍図に比定し、町割りを示したのが第2図である。

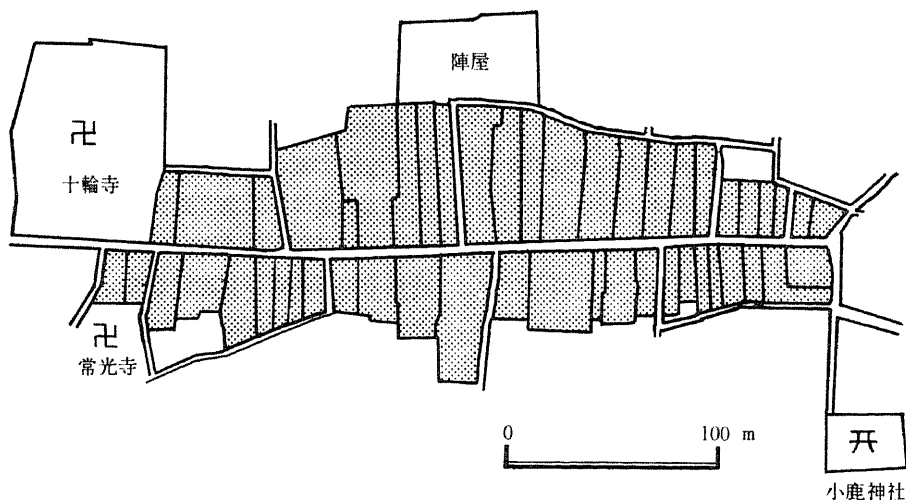
町並は幅の広い直線の道路を基軸に、両側に短冊型に地割りが施された屋敷地を連ねていた。町並みの両端は、西を十輪寺と常光寺によって、東を遠見遮断する鍵型の道路で区分された。屋敷検地帳に「御蔵屋敷3反3畝2歩」分が除地とされている陣屋の所在地は、町立て当初に設置された町並み東南の場所から、町並みのちょうど真ん中ほどにあたる字北町裏に移されていた<sup>10)</sup>。

十輪寺は、現在真言宗豊山派の寺院であるが、もとは別所において十輪坊という天台修験であった。日光法印が中興開基し、町立てに際して町並西端に移動したらしい。慶安検地では3反8畝歩が除地された。

十輪寺と道路を隔てて対置していた常光寺は、除地2畝6歩が認められ、十輪寺の末寺であった。そのあたりは「たかすだ」と呼ばれる場所で、常光寺と成る以前は、せんかい坊という行人が別当を勤める鷹巣多薬師如来があったらしい。そして、「町並出来の節、火防為御祈祷あたこの宮造立申候」<sup>11)</sup>とあるように、町の建設にともなって現在ある愛宕社を合祀し、赤平川対岸に切り立つ山の名である医王山を山号とする常光寺に変わった。

町並の東端の鍵型道路を南に向かった場所には、小鹿野明神が勧請された。小鹿野明神は、それまで下小鹿野村泉田原の塚の上にあったものを、慶安5年2月に旧社殿だけが残る現在地へ移転したと伝えられている<sup>12)</sup>。小鹿野明神は、上の諏訪明神に対して、下の諏訪社と呼ばれ、両社あわせて上小鹿野村の鎮守となった。翌承応2年(1653)6月には、さらに、天王社が市神として勧請され、町並み道路の中央に奉られた。

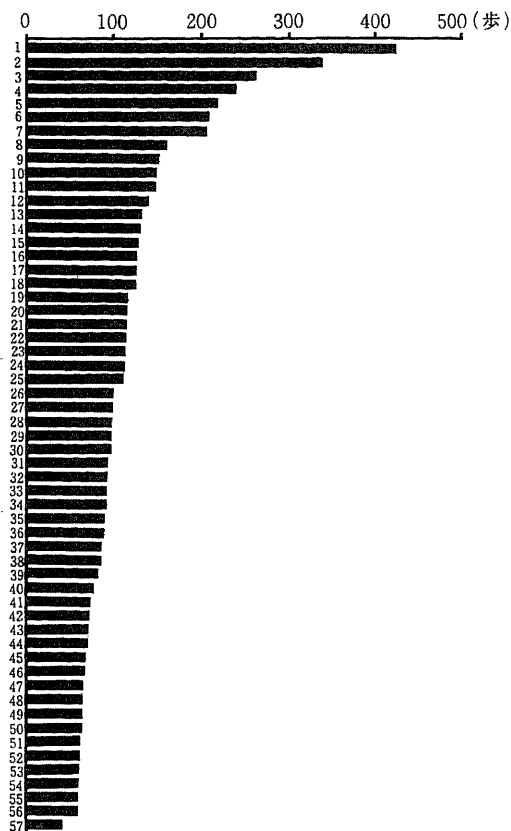
つぎに、町屋敷についてみると、各屋敷の形状は一定しておらず、厳密には均等な短冊型ではないことに気づく。個々の奥行きに違いがあって、裏通りの発達がみられない。特に中町に



第2図 近世初期の小鹿野の町割  
( 岩田家文書「慶安5年武州秩父郡小鹿野上郷御検地屋敷帳」  
および小鹿野町役場「明治21年地籍図」より作成 )

その傾向が著しく、町屋敷面積にも大きな較差があった。わずかに下町において比較的均等な地割り形態が認められるに過ぎない。

第3図は、慶安検地帳にもとづき、町屋敷の面積順位をグラフ化したものである。最大の屋敷面積を保有する名請人は「さつま」で、1反4畝5歩の屋敷地を有していた。ついで、「勘左衛門」が1反1畝11歩を有し、この2人が屋敷面積の中では突出している。この2家は上小鹿野村の相名主を勤めていた。しかし、全57筆のおよそ3分の2にあたる屋敷は4畝歩以下の面積であった。これら比較的面積が小さい町屋敷の間口は、面積3畝歩～4畝歩にあつては8間間口が卓越し、面積



1：さつま 2：勘左衛門 3：太郎右衛門 4：左馬助  
13：忠左衛門 30：太郎左衛門 37：市左衛門

第3図 町屋敷面積の順位

(岩田家文書「慶安5年武州秩父郡小鹿野上郷御検地屋敷帳」より作成)

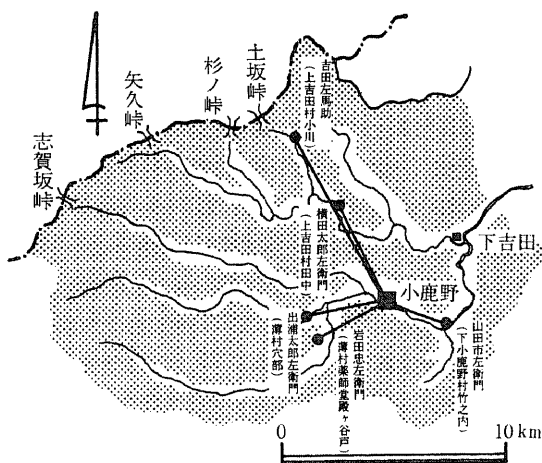
2畝歩～3畝歩では4間間口が多い。つまり、これらが標準的な町屋敷であったといえる。

さて、こうした町屋敷の名請人は、どのような人々であつて、またどこから移つてきたのであろうか。屋敷名請人のうち、来歴を伝承に伝える者が何人かある。それらを「由緒書」に基づき、町へ来住する前に居住した場所を第4図に示した。

町屋敷面積で第3位の「太郎右衛門」は、下町に屋敷を構える出浦家である。鉢形北条氏の家臣という出自を伝え、薄村穴部から移住してきた。ついで、「左馬助」は中町に住む吉田家であり、上吉田村小河から移住した。第13位の「忠左衛門」は上町に住む岩田家である。岩田家は、薄村薬師堂の字殿ヶ谷戸に居住したと伝えており、小鹿野の町立てにともなつて移住し、割元名主に任ぜられた。上・中・下の3町に各々屋敷を構えた上記3人は、小鹿野の市日に連雀の宿を営業する特権を有した。このほか、屋敷面積は小さいが、第30位の「太郎左衛門」は下町に居住の横田家であり、上吉田村田中から移住してきた。第37位の「市左衛門」は山田家であり、下小鹿野村竹ノ内から移住してきた。

彼らの来歴で注目される点は、いずれも鉢形北条氏の「浪人」と伝えていることである。たとえば、吉田左馬助は、元来藤田氏、鉢形北条氏家臣であつたが、鉢形落城後は上杉氏に仕え米沢に働き、その後越前の松平秀康へ奉公し、元和年間に小鹿野に移住した。また、岩田家は、丹党末裔と伝えるが、本来白鳥庄岩田を出自の地とする土豪的商人であつたと考えられる。伝承では、岩田忠兵衛が薬師堂から小鹿野へ移住する際には、薄村遠藤や大木から一族郎党を伴つてきたとされ、そのため彼らには遠藤、大木姓を名乗らせたという。そして上町の屋敷は、代官大河内金兵衛から拝領されたと伝える。

つまり、これらの人々は、西秩父に本拠を定め、鉢形北条氏と関わりを持ったかつての小土豪ないし土豪的商人であつた点で共通している。吉田左馬助のように、天正18(1590)年以降に他家へ再仕官した者もあつたが、多くは本拠地に帰農し、「浪



第4図 伝承にみえる小鹿野町来住以前の居住地  
(岩田家文書「山緒書」より作成)

人」となっていたのであろう。徳川氏の代官らは、陣屋町立てに際して彼らに町屋敷への移住を奨励し、戦国末期に彼らが保持した商業的特権や職能を積極的に活用したとみれる。彼らは屋敷を拝領し、連雀宿の権利を与えられるなど、代官によって特権が保護されたのである。近世初期、小鹿野の町はこうした人々が重立衆を構成した。中世戦国期の秩序と新しい秩序が混在した移行期のようすを象徴している。

### 3) 市の成立と岩田氏

小鹿野の市がいつから始まったのかを知るのは、市立の目的や市の機能、あるいは秩父地方の流通の発展を考える上で重要な問題である。

『小鹿野町誌』は、市立の起源について次の3つの年次をあげている。慶長2年(1597)、慶長12年(1607)そして承応2年(1653)とである<sup>13)</sup>。このうち承応2年とする見方は、先に述べた市神勧請の年次を重要なよりどころにしている。そして、翌承応3年9月晦日の日付を有する、小鹿野の岩田忠兵衛と中薄の小兵衛および小森の茂左衛門との、次の2点の内済証文<sup>14)</sup>がその史料的根拠とされている。

#### 一札之事

一、薄村前々より立来申候市之儀、此度貴殿小鹿野江御引被成候所、村中之者迷惑之由彼此申候所、段々世話人立入相済申候、然ル上はわずかにても滞り申者決無御座候、為念仍如件

承応三年九月晦日

中薄 小兵衛 印

小森 茂左衛門 印

忠兵衛 殿

(表題欠)

此度小鹿野に晦日市たて申に付、拙者不届にて薄衆江内所不申とて、薄衆御断に候、乍去、我等は此市我等たいしやうにてはたて不申候、小かの衆市たて之由被仰候間、そのなみに成候ては申候。其に付、以来やくしとう町にても、其外あきないいたさせましき之由被仰候間、尤仕ましく候、仍如件

九月晦日

忠兵衛 印

(承応3年カ)

中薄 小兵衛殿

其外御町衆

小森 茂左衛門殿

つまり、両者に記される「此度」こそが、その前年に小鹿野の町中に市神天王社を勧請した承応2年であるとされた。しかし、この2点の史料から小鹿野の市立年次を承応2年と考えることは適切ではない。なぜなら、記されているところはあくまでも「晦日市」なのであって、五・十の六斎市がはじめて立てられたこととは同一ではないことに注意すべきである。

むしろ、市立の起源については、もう少し早い時期に求めるのが妥当ではないだろうか。なぜなら、徳川氏の関東入封以後、直轄領地の支配にあたった代官らは、旧来の市を掌握するとともに、各地に積極的に市の設立を行ったのであり、秩父地域にあってもそうした動向と無関係だったとは考えにくいからである。さらには、当初多くの代官は在地支配を行っていたため、市は陣屋の所在地に新設されたり、あるいは旧来の場所から移されたりしたことが知られている<sup>15)</sup>。それは、支

配地から徴収される年貢の地方払や、あるいは年貢金納のための換金化の機会を六斎市によって充足させる必要があったのである。

寛永19年(1642)の年貢請取状<sup>16)</sup>は、永高制に基づく年貢金納体制の実態をよく表している。

一、永貳貫三百四拾五文	綿本代にて納
一、永壹貫百四拾四文	漆にて納
此漆壹貫六百廿五匁	
一、永四百年文	荏にて納
此荏貳石也	
一、永百四拾貳貫三百八拾壹文	金にて納
合百四拾六貫二百七拾文	
外浮役臨時物	
一、永四拾三文	絹の割
一、永五百六拾三文	紙の割
一、永壹貫四百五拾三文	綿のわり
一、永壹貫五百九文	役綿ノ本
一、永九百三拾六文	右之割
一、永壹貫三百五拾文	紙舟役本
一、永貳百七拾文	右之わり
合六貫百貳拾四文	
二口継合百五拾貳貫三百九拾四文	
此外口銭済 判	
右請取処皆済也仍如件	
寛永拾九年極月廿日	大与兵 判
名主百姓中	

史料によれば、年貢高146貫247文のうち綿、漆、荏など一部現物納もあったが全体の97%は金納であり、その比重は極めて高い。と同時に、これだけ年貢金納が徹底されている背景には、秩父地方では既に後北条氏の時代において換金を前提とする絹などの生産が広範に展開し、貨幣流通が秩父地方に深く浸透していたとみななければなるまい。したがって、当然、換金の機会としての市の存在も、現在確認されている以上に多数存在したであろうし、徳川氏の支配下にはいってますます整備される必要があったのである。

そのような考えに立ってみると、田嶋家文書の文政4年(1821)「為取替三町内市場義定之事」

にある「當町市場之儀慶長四亥年中より取立」と記された年次は、極めて重要視すべきことと考える。市立年次を慶長4年とする同史料は、残念ながら、これ以上の市立に関する具体的事実については語っていない。しかし、同史料には、その37年後にあたる寛永12年(1635)2月に「御役人様足五郎兵様、斎三郎右様、右御兩人御越被遊」て市定を行ったと記していることから、別に市立の経緯を具体的に書き記した文書を参照して作成されたものと考えて間違いなからう。したがって、かなりの年月を経て書かれているとはいえ、慶長4年を小鹿野の市立年次とする信頼性は高いと思うのである。

ところで、寛永21年(1644)に岩田忠左衛門が田嶋四郎右衛門との間で連雀の宿をめぐって争い、代官に宛てた訴状のなかに、「小鹿野町之市、壹ヶ月に五度つつ立申候が、拙者親才覚を以六度之市に相定候」と述べたくだりがある<sup>17)</sup>。つまり、開市回数が月5回から6回になったこと、そしてその功績は「拙者親」すなわち岩田忠兵衛にあるということを主張した記述である。月5回の市とは、ある一定の開催周期にもとづく定期市であったとすれば五斎市と言うべきであろうが、いかにも変則である。それは、本来六斎市たるべき市のうち1回欠いている姿である。では、なぜ1回欠けなければならないのか。それを考える手がかりは、前述の承応3年9月晦日付の2点の史料にあると思われる。

先の史料に記載の「小鹿野に晦日市立申に付」こそは、それまで欠いていた1回、五・十の六斎市日のうちの「晦日」分の増設を意味しているのではないか。とすれば、岩田忠兵衛が小鹿野に移転させた薬師堂の「前々より立来申候市」とは、六斎市ではなくて月1回開かれた「晦日市」であったであろう。さらに付言するならば、そうした薬師堂の「晦日市」は、当初、小鹿野に開かれる月5回の市と併せて六斎市を形づくっていたのではなかろうか。つまり、小鹿野の町立にともなって薬師堂を離れた岩田氏は、小鹿野の市立に際して、「屋くしとう町」ととどまった「町衆」に「晦日



市」を新たに分与することによって彼らの既得権益を保護したのではあるまいか。

岩田氏がこのように、小鹿野および薬師堂の市に関して強権が発動できたとすれば、それはどのような事情によるものであろうか。岩田氏が北条氏邦に仕えた時分の職能を正確に把握することはできないが、「鉢形城絵図」<sup>18)</sup>によれば、城下の連雀小路に屋敷を拝領していたことがわかる。つまり、岩田氏は領内の経済運営を主な職能とし連雀商人などを司り、また薬師堂の地を安堵された、いわゆる土豪の商人であったと考えられる。それゆえ、代官から割元名主の役職に任じられ、連雀宿の特権を与えられた。したがって、その役職と特権によって、岩田氏が小鹿野の市立計画を主導し、市を実質的に掌握していたと思われる。

さて、市はいったいどのような場の様相を呈していたのだろうか。前述のように、小鹿野の町並は上中下3町に分けられていたが、五・十の市日はその3町交互に市場が開かれるように割り振られていた。そして、3町それぞれに「市頭」がいて市場差配にあたり、彼らは「連雀見世」を営んでいた。下町は出浦太郎右衛門、中町は吉田左馬助、上町は岩田忠兵衛であった。こうした市場の仕組みが2人の陣屋役人によって定められたのは、寛永12年のことである。市定の内容は、まず上中下3町の「市場三カ所に相定」ることとし、「絹紙太物穀物鋳物師塩あい物薪くだ物」を扱う「萬之賣買人」と「見世」「宿」さらに「右物附送り人等迄」を「御定被下」たものであった<sup>19)</sup>。そして、「当日市場之外に而ハ人馬共に壺人も宿仕間敷候」という付則を加えて、「若し、此定違乱仕候ものをハ田地屋敷御取上、所ヲ御払可被旨」を町中が確認し、「連判仕奉差上」たのであった。なかでも、市において売買される品目として絹、紙、太物、穀物、鋳物師、塩、あい物、薪、くだ物の9品目を書き上げられていることは注目される。

品目の性質から判断して、絹・紙・太物の3品は、小鹿野をはじめ赤平川水系のより上流域の村々で生産された産物が市を媒介として秩父以外へ流通したものだろう。生産者が製品を持ち寄り

市に集荷された。他方、塩・あい物は、江戸方面や信州上州方面から連雀商人の手を経て市へ流入する品目であり、内陸山間部の秩父盆地にあっては生活必需品である。穀物は、永高制による年貢銭納のためには、小鹿野市にとって必要不可欠な品目であった。生産者は畑作穀物をここで売って換金し、また、水田面積が少ないために米を購入することが必要であった。鋳物師は直接職人が市で技術提供ないし自製品を販売したものか、あるいはここでは単に鋳物製品に対する呼称であるのか明確にできないが、いづれにせよ市に参集する購買者に供給される品目である。薪は農閑期の稼ぎとして伊豆沢村などの山間村落から市へ持ち出され、小鹿野の町家を主たる購買層とする局地的な流通とおもわれる。くだ物については詳細は不明であるが、梨をはじめ近世においては多分に薬事効果があるとされ、香具師によって市を通して流通していたものであろう。しかし、後年、柿が秩父地域の主要な産品として現れることから、地域内生産物の集荷であったかもしれない。

これら主要品目は、市において「座」の権利を持つ商人によって商われた。前述の寛永21年の史料には、「金兵衛様御代官之時、小鹿野惣町人御手代衆へ申上候。万商売物之座定め、市わり御座候が、右四郎右衛門所へハ塩あい物四間之内に定申候」という記述がみられる。大河内金兵衛の代官在任時代、寛永12年に、四郎右衛門には市場において「塩あい物」の座が定められたと述べている。すなわち、3町内に交互に開かれた小鹿野の市では、それぞれの市場がこうした「座」によって構成されていたのである<sup>20)</sup>。具体的には、自分の町内で市が開かれる日に、屋敷と道路との間の「市庭」や「軒先」で自分が持つ「座」の商品や生産物を売買した。いわゆる市での営業権と解釈されるが、そのため市では各自が自由に「見世」を出すことはできず、他所から市へ売買に来る連雀商人や生産者は、こうした「座」の権利を持つ者に市場銭や座銭を支払って場所を借り商売をしたのである。

ところで、四郎右衛門に定められた「塩あい物」

の座は、間口が「四間之内に」とされたことに注意を払いたい。この四郎右衛門の町屋敷は、慶安検地によれば12間半の間口を有している<sup>21)</sup>。つまり、四郎右衛門の「座」4間という幅は、彼の屋敷全体の間口のおよそ3分の1に過ぎない。つまり、4間という幅がひとつの座の単位であったといえる<sup>22)</sup>。

このように、近世初期の小鹿野の市は、代官から特権を保護されたかつての土豪的商人の岩田氏などが連雀宿を司っており、連雀商人が「座」権利を持つ者の軒先や市庭を「見世」借りして売買を行っていた。

### Ⅲ 近世中・後期の町の変質

#### 1) 享保期の商品流通

一般に、江戸が大消費都市として関東各地を求心的構造のなかに組み入れたのは、およそ元禄期頃といわれる。こうした江戸を中心とする流通機構の確立が進みつつあったからこそ、元禄期にはじまる代官・知行者の江戸在住と、それにともなう陣屋の廃止といった幕府政策は順調に遂行されたのである。そのことがさらに、関東各地の諸産物の江戸との結合を促進することになった。本節では、柴崎家文書の「店卸帳」<sup>23)</sup>の分析を通して、近世中期、享保期から宝暦期にかけての商品流通の展開を検討する。

柴崎家の来歴について詳しく伝えた史料はないが、享保期以降商業経営の拡大が著しく、絹や糸を主に取扱った。幕末期には小鹿野の生糸取引の中心的役割を果たし、荷継ぎ問屋を兼ねた陸運業にも経営を拡大した。ここに取り上げる「店卸帳」は、享保年間から始まり明和2年(1765)まで経年綴られている。柴崎家の本来の経営基盤は、質屋を中心に置いていたようである。その蓄積を資金に、一方で、種々の特産物の集荷を行っていた。

柴崎家が取扱った産品は第1表に示すように、かなり多様であった。これら品目は小鹿野を結節点として集荷された商業的換金作物であり、西秩父の農業生産のようすをよく表している。品

目の性格から流通の方向を注視してみると、取扱ひ品目全体に対して他地域から移入された品は極めて少ない。柴崎家が西秩父で生産された特産物資を他地域に移出する、いわゆる産地間屋的性格を有していたことを知ることができる。

主要な移入品のうち最も取引の多いのは米であった。水田面積の少ない西秩父地方では、米が自給できた地域は限られていた。また、小鹿野の町では江戸時代を通じて酒造を営む商家が多かった。米の移入はこうした醸造米としての需要も反映していよう。享保・宝暦年間を通じて、米の買い付けは原口源左衛門という商人との取引によっていたが、詳細はわからない。ただし、享保16年(1731)に「忍城米」20俵を寄居の政右衛門に預け置いたとの記述があるように、主に忍藩領の蔵払米を買い付けていたようである。米のほか、重要な移入品としては享保8年に「才田六俵竹原武俵」と記された塩をみることが出来る。そのほか、宝暦11年(1761)には江戸石町の問屋加平次店から「油十樽買預け」ている。

他方、西秩父の生産を特徴づける重要な品目が取り扱われていた。まず、「半紙」あるいは「かみ」と記される紙は、山中地方<sup>24)</sup>で生産された紙である。享保年間には竹平の多兵衛などを通して集荷していたようだが、多くは扱っていなかった。寛保・延享になると「山中かい 半紙四十二表廿三両三分五百十六文」(延享5年)と取扱量が増加し重要な産品になった。たばこも、安永・天明期には小鹿野にたばこ市が設立されるほど、西秩父地方を代表する特産物となった。しかし、柴崎家店卸帳では、享保期には移出品のなかではまだ主要な地位を占めるに至っていない<sup>25)</sup>。このほか、注目を要するのは漆・大豆の二つである。この2品目については「手金」を貸し付けている点で共通している。つまり、柴崎家は漆と大豆の集荷については、生産農家にあらかじめ手金を与え、収穫された現物をもって時の相場で決済する、いわゆる問屋前貸形態をとっていた。漆と大豆はともに、江戸問屋に送られていた<sup>26)</sup>。また、柿、こんにゃく玉、岩茸、そして塩硝といった品目は柴

第1表 近世中期柴崎家の取扱品目（享保～宝暦期）

	享保10年（1725）	元文5年（1740）	寛延3年（1750）	宝暦10年（1760）
米	米8俵（2両801文）			
絹	絹12疋（7両）	絹3疋平1疋（3両2分300文） 絹（34両1分）a		絹152疋（83両1分636文） 絹100疋（62両1分） 平1疋（2分）
糸	糸410匁（18両3分723文） はぐち糸（3両3分816文）	糸（31両1分500文） 前橋糸（60両2分925文）a 大宮糸（28両380分）a まゆ（74両2分203文）	糸（50両2分1貫10文） 糸（9両2分2貫875分）	
山			まゆ（33両3分338文）	まゆ（27両208文）
実綿	さねわた（814文）			
たばこ	たばこ（5両2分2朱1貫394文）			
紙	半紙（10両1分1貫30文）			半紙ノ代（2分550文）
茶	茶6本（3分35文）	茶（33両307文）		茶（26両1分1貫864文）
漆	漆（4両3分624文）	漆（58両3分791文）		漆12桶（66両1分317文）
大豆	大豆（31両3分504文）	大豆（94両1分116文）	大豆（94両2分789文）	大豆（36両2分1貫186文）
麦	棒手麦（1両1分892文） へつぶがい麦（4両3分436文）			
こんにゃく	こんにゃく玉（3両3分157文）			
漆手金	（5両2分2朱）	（26両3分200文）	（30両小2朱300文）	（19両）
大豆手金	（15両3朱）	（68両2分54文）	（56両小2朱1貫文）	（38両2分）
米買金		（100両）		
流物売残	（1両1分550文）			
店有物		（78両1分554文）	（67両3分530文）	（220両）
有金		（213両19貫336文）	（67両2分34貫540文）	（2両2分17貫154分）

（柴崎家文書「店卸帳」により作成）

（注）a.「田陽寄合」、b.「藤岡町善左エ門殿ニ有」

崎家の取扱品目全体に対しては重要性は低いが、西秩父で生産される貴重な特産物であった。

柴崎家が扱った品々の中でも、享保・宝暦期を通じてとりわけ重要な位置を占めたのは絹と糸であった。出荷された絹には上絹・平絹・横物（横ふとり）・山絹など製品の別が含まれていたが、平絹と横物が移出の中心を占めた。取扱量も元文・寛保期頃から著しく増加し、同時に流通の範囲も拡大した。宝暦期にはいると、「（宝暦八年）寅十月十五日かい仕切参 きぬ百疋三十七両三分四百五十文 預ケ藤岡善右衛門」とあるように、柴崎家は絹の買い付けを藤岡の諸屋前右衛門を通して行っていた。さらに、宝暦13年（1763）には、絹200疋と「小川絹」100疋を同人へ預け置いていた。つまり、柴崎家の絹集荷はこの頃には秩父盆

地を超えて北関東各地の絹をも対象に含めていたのである。と同時に、宝暦6年（1756）、秩父大宮の大市で取り引きされた絹は4,500疋で、金額にして2,700両であったから<sup>27)</sup>、この時期柴崎家を取り扱っていた絹はかなり多かったことが窺われよう。それらの絹のいくらかは、「絹六疋京都に染遣置申候」（宝暦5年）、「辰九月二十一日京森井利右衛門方へ遣し置分絹百廿疋七十四両貳分四百七十貳文」（宝暦11年）とあるように、京都へ直接送り出されていた。

他方、享保10年（1725）「絹十貳疋七両則江戸に有」に示されるように、既に江戸問屋へ向けての絹の流通は確立されていた。柴崎家と絹の取引関係を有した江戸問屋は、「神田丁いせや太兵衛」「中通丁釘や喜兵衛」「下くら惣右衛門」などで

あり、このうち、いせや太兵衛との結びつきが早くからあったようである<sup>28)</sup>。

同様の傾向は、糸についても看取できる。ただし、享保9年(1724)に「糸四百廿六匁ノ代則京に有」とあるように、登せ糸については絹の場合よりも早くに京都との取引が行われていたと考えられる<sup>29)</sup>。柴崎家の糸の買置量は元文期を転機に増大した。享保14年(1729)の糸買置は、金額にして7両2貫508文(2貫338匁)であったが、元文5年(1740)には119両3分1貫805文にのぼった。買置された糸の著しい増大は、元文5年に柴崎家が町内の田島家と寄合のうえで、「大宮糸」(28両380文)と「前橋糸」(74両1分238文)の買い付けを始めたことと、自家のみの買置分(31両1分500文)を有したことを直接の原因とした。このことは、柴崎家自身の糸買い付けが、従来の西秩父という範囲から糸の一大集散地である前橋に拡大した点で、一つの画期を表す重要なことがらである。

さらに付言すれば、こうした柴崎家の糸取引の画期が、田嶋家と「寄合」で購入したことを背景としていることにも留意を要する。他の商家と元金を共同出資し、それだけ多くの糸買置量が必要とされるほど、糸に対する需要が高まっていたのである<sup>30)</sup>。したがって、元文期は単に柴崎家の経営上の画期にとどまるのではなく、糸取引・絹生産が秩父地方全体に新たな転換期を迎えていたと見るべきであろう。

## 2) 市の変質

享保期から宝暦期にかけての商品流通の進展にともなって、小鹿野の市もまた変質していった。市は、西秩父の商品作物生産を反映して、特定の産物の集荷機能を強めていった。

そのひとつの典型が、安永・天明期に始められた「たばこ市」に表出している。西秩父地方でたばこ生産が始まったのは元禄期頃からのことと思われるが、安永・天明期にかけてたばこの流通は最盛期を迎えた。次に掲げる史料は、天明7年(1787)9月に町内の弥市右衛門が四郎右衛門に宛てたもので<sup>31)</sup>、たばこが専門の市を必要とする

ほど、流通量が拡大していた様子を示している。

### 為取替申規定証文之事

近年拙者致世話多葉粉市取立候処、拙者方内々不手廻りに付、貴殿方にて御引請市御立被下候様、此度及相談御互に熟談承知之上は、貴殿方にて御斗ヒ被下、市繁昌いたし候様頼入候。尤名前之儀は諸事連名にて取斗ヒ可申候。

一、帳面売高口銭之内、御差人之金子利分諸懸り諸雑用等引去り、残口銭高内にて拾歩之内歩、我等方へ被遣候筈相極候。尤當日荷物捌方に応、口銭之過不及可有之候間、諸事當日限り之勘定に可致候事。

一、右市一件に付、何事に不寄異変之儀も出来いたし候は、表向之名前御連名にて取斗ヒ萬事一存之取斗ヒ致間鋪候。

一、右市之儀此來拙者手廻り候て、我等方にてても市立申度節は、隔年々相立、其節相互に熟談を以宜キ方に相隨ヒ累年市繁昌いたし候様取斗ヒ可申候。且亦、此來我等方にては手廻り不申候とも、外々之仁致荷(たん)不及御相談市相立申間敷候。尤右一件に付相互に睦敷いたしかさつヶ間敷儀取斗ヒ申間鋪候事。

右之通相定候上は少度相違無御座候。為後日義定為取替証文、仍如件。

天明七年未九月

弥市右衛門 印

四郎右衛門殿

この内容からみる限り、弥市右衛門は従前からたばこの集荷卸を商っていたもので、おそらく、たばこ生産の急増に対応すべく経営の規模拡大を企図して「たばこ市」を設立したものと判断される。

弥市右衛門がたばこ市から得る利潤は、「當日荷物捌方に応」じてはいる口銭収入によっていた。すなわち、たばこ市の流通の構図は、生産者が持ち出すたばこを「市場」に出店する買い付け商人が買い上げ、買い付け商人は宿問屋に売り、宿問屋が仲買人へせり売するという段階を含んでいたことがわかる<sup>32)</sup>。

しかし、「拙者内々不手廻りに付」とあるように、弥市右衛門ひとりでは資金繰りに困るようになって

て、四郎右衛門に「御差入之金子」を頼んで出資者になってもらった。そして、その市の運営に関しては「名前之儀は諸事連名にて取斗ヒ、萬事一存之取斗ヒ致間鋪」とし、また口銭高のうち20%を弥市右衛門が受け取るなど、2人の間で共同経営することになった。つまり、既得権益を譲歩してまでも資本を強化する必要があったのであり、逆に、それだけたばこの流通上の重要性が増していたことを意味している。

他方、上流の薄村では、天明期には既に、たばこ生産者から製品を買い付ける複数の農間商人が存在していた。つまり、生産者が製品を市へ直接持参することがなくなっていた。たばこの産地内において流通の段階が高次化しはじめていたのである。この後、文政期になると、たばこ農間商人は江戸問屋との間で直取引を行っている。つまり、小鹿野の市を通す旧来の流通手段をはなれて、別の流通チャンネルを拓くにいたったのである。

農間商人の台頭は、秩父の主要な産品である絹の流通についても、これより後、たばこ市と同様な状況を生じさせた。市における絹の取引の様子は、次に示す大宮郷の一・六の市を見聞して記した文政6年(1823)の「秩父記」<sup>33)</sup>が参考になる。

けふは此丁市日にてあき人などかれこれにぎふふ、柿うる者も多ければとのへつ、此市ハ絹を多く売買す、家の軒前にうすべり敷ていく所もおれり、近くの村々より白絹持出てかのなみ居たる者にさし出せば、あさいか程という、おのが心に叶わねば又こと所に持て見す、さてかく買集めたる絹問屋有て、こりとなし江戸へ下すになん其買物のあたひ定るをきくに、二百五十文に侍り、又は三百文に侍りなど絹を指もておしこきていう、初めの程はいぶかしかりが、よくよく思へば此絹ことごとく壺正なれば、三分と二百文或は三百文といへるにて、三分は定まり事なれば、夫が上のあたひをいへるなりけり

これによれば、当時の大宮郷の市での絹取引は、まず農村から市へ生産者が製品の白絹を持参し、居並ぶ買い付け商人と値段を自由に交渉し、買い

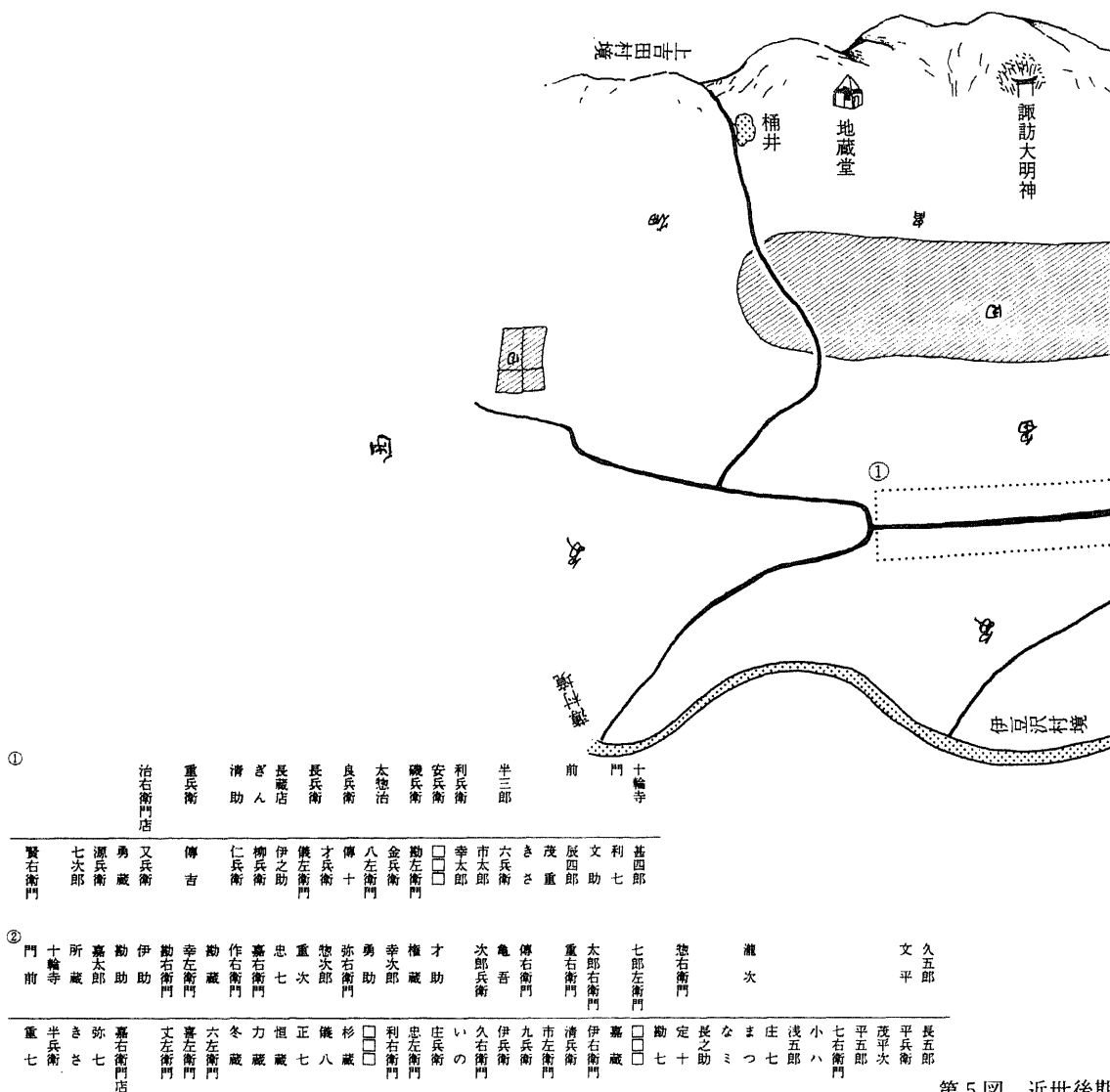
付け商人は集荷した絹を絹宿(問屋)へ売り渡していた。絹宿はそれを「江戸へ下す」、すなわち江戸の本店問屋(代買人)へせり売る構図であったことがよみとれる。

他方、在方の生産者を巡って絹を集荷し、市を通さずに、江戸ないし仲買人と直接取引を行う「絹せり商人」も増加しつつあった。天保期には、こうした流通上の変化に対して、従来の権益を主張したい絹宿や町方が、大宮郷の市を介在する流通構造に戻すよう次のように申し合わせた。

近年町方衰微いたし、追々明屋敷出来候に付、町方繁昌相成候様、絹せり商人在方、不相廻、町内、絹宿売株願、右宿江罷出、口銭取にて坪方之もの持出売候様にいたし、代買ハ絹代現金買に其市切に払候様相成候ハハ、是迄と違、市人沢山出、町内も自然繁昌して、坪売、宿売、代買、其幾々ハ是又為合にもよろしき道理につき(後略)<sup>34)</sup>

こうした農間商人の中から町へ定着するものもあらわれ、それが町の拡大を引き起こした。文化・文政期にはそのように拡大した町が、市へ勢力を伸張しはじめ、また一方で急激に増加しつつあった市場商人が小鹿野の市へ参集し、もはや旧来の市の枠組みではおさまらないほどになっていた<sup>35)</sup>。次の史料は取り決めが守られなくなった市場の現状について旧に復し行うこと小鹿野の3町で決めたものである<sup>36)</sup>。

(前略)其以後追々町内繁榮致し、市商人多分に相成、御定之市場にては場狭に相成、自然先義定相破れ市見せ商人銘々勝手俣に相成、上中下之無別猥に相成、別て近年下町市場皆潰に相成候に付、此度三町内一同相談之上、古來之通三ヶ所に相改候上ハ以來當日市場之外にてハ三町内一同前々之通商人一人も差置中間敷候。別極月市之儀ハ格外之義に付、市場所相延し定杭建置、永々相用諸商人差支無様に仕、三ヶ所共甲乙無様申合、前々市場御定メ被下置候形不相破様可仕候。万一、右義定相破り市場之外に商人差置候状又ハ隠賣等いたし候もの有之ハ、其品其所に預ヶ置可致出訴候。



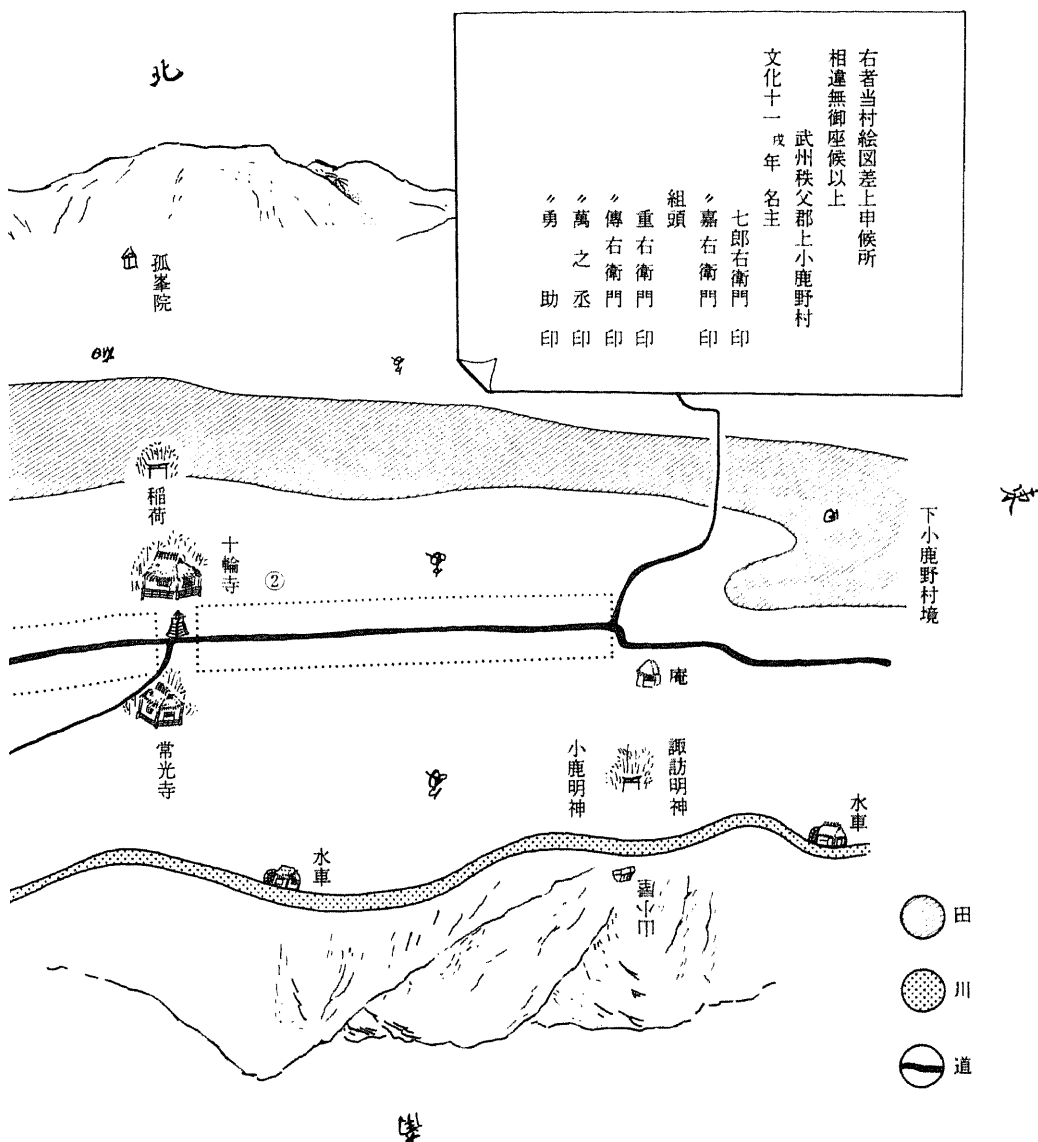
第5図 近世後期  
(田嶋家文書「文化11年上小鹿野村

依之前書之通取極義定連判，仍如件  
文政四巳年

下町  
中町  
上町

て，他町内の店が伸張していた実態がここに存在した。言い換えれば，旧来の「座」の権利が消失して久しい実態がここに現れていた。そうした事態を進めたのは流通の拡大であり，またそれにもなう商人層の増大であった。

つまり，従来から市日をもつ町内の権益を無視し



の小鹿野の景観

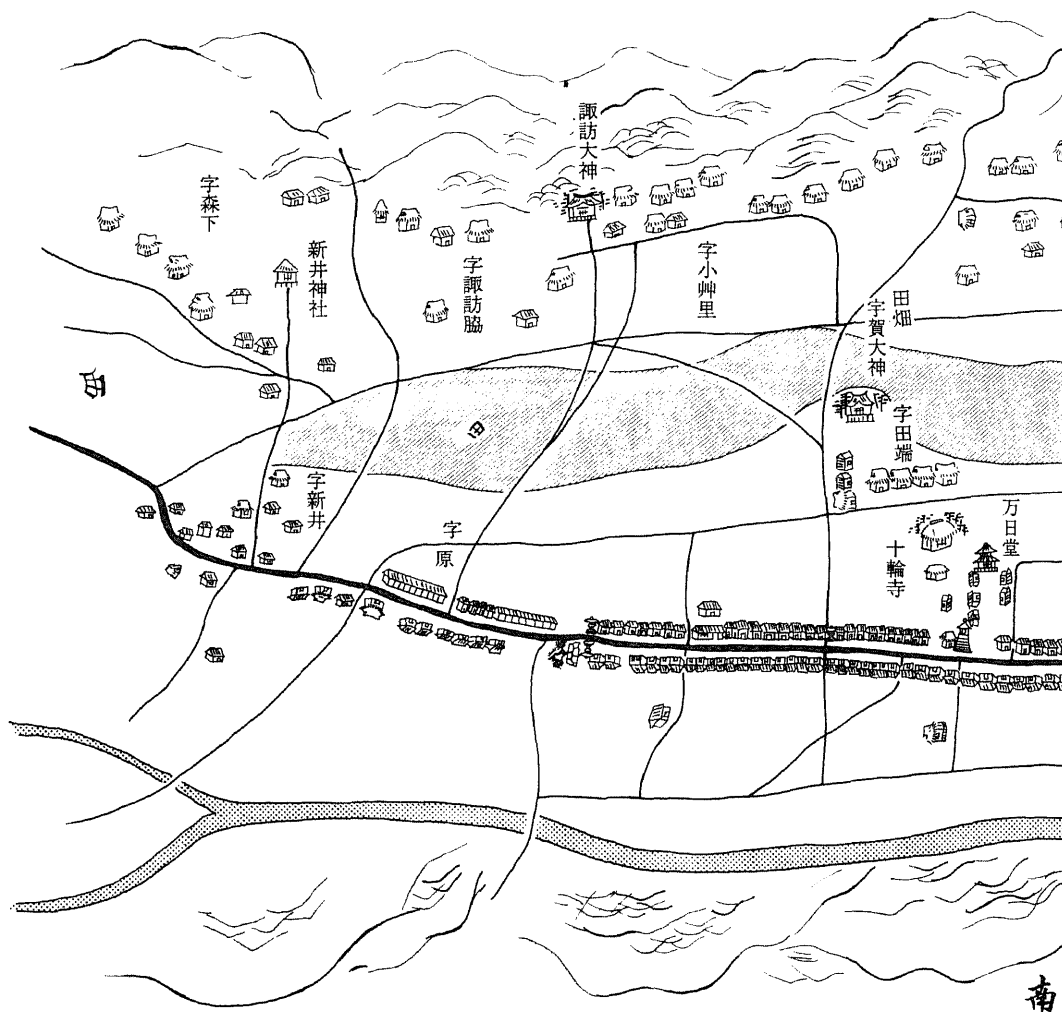
絵図」より作成，原田洋一郎作図)

### 3) 町の拡大

上述のように，享保期以降の商品流通の拡大とそれにとまなう市の変質と並行して，町は構造的に拡大していた。

第5図は文化11年(1814)の上小鹿野村の絵図<sup>37)</sup>である。近世初頭の上町・中町・下町に加

え，上流部に向かって，上町より西の「原」と呼ばれた場所へ町並みを延ばしていた。町並みの西端は「傳吉」「重兵衛」の屋敷であり，それより新井の追分けまでは6軒が散在するだけで，道の両側には畑が広がっていた。しかし，そのなかには「治右衛門店」のように店舗が存在したことは



第6図 明治初年  
(田陽家文書「年不詳」 小鹿野町絵)

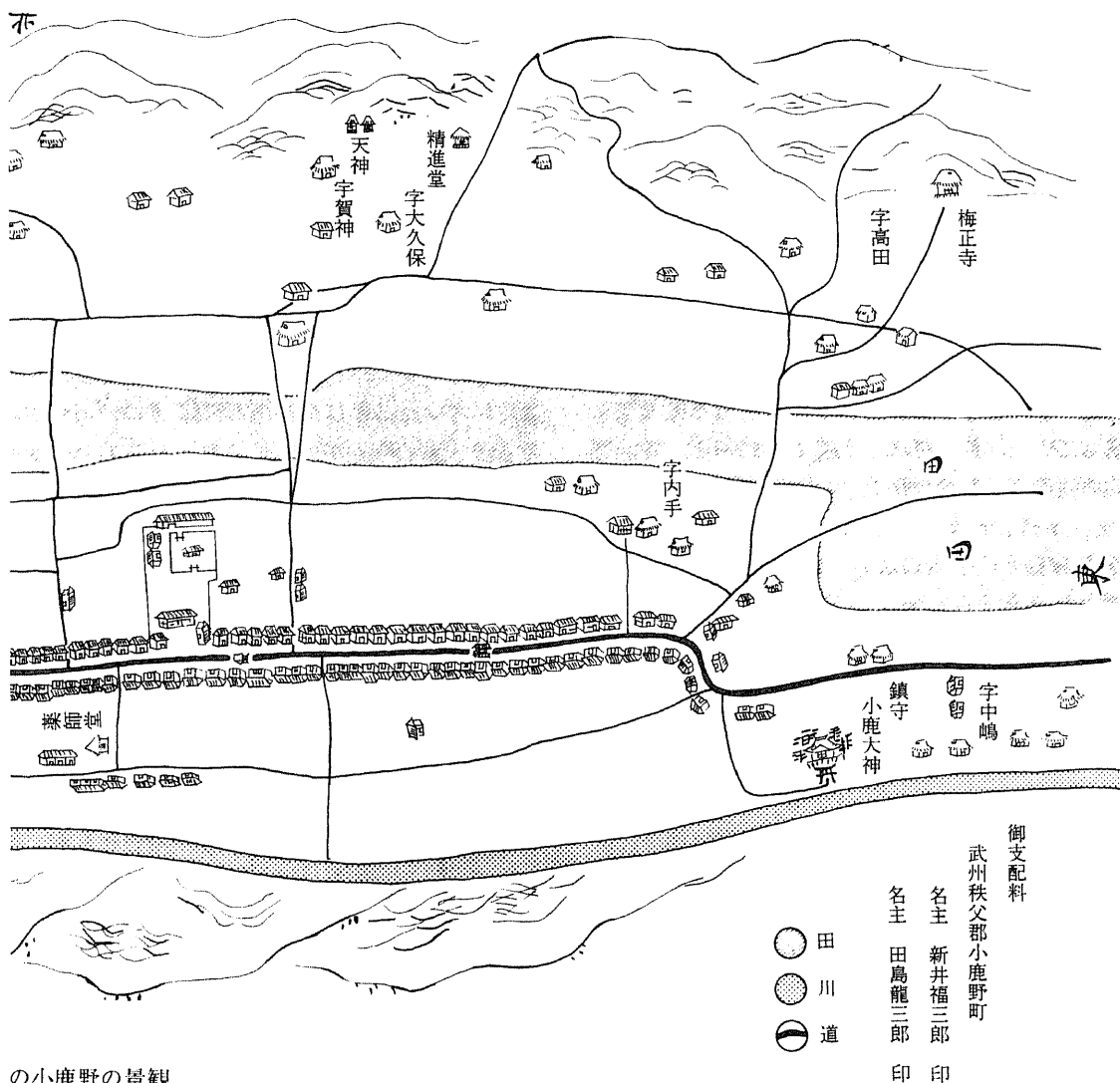
明かで、町並みの拡大は常設店舗の増加を意味していた。

それより後50年間、明治初年までの間に、町並みはほぼ現在と同じように、西端は追分けまで延び家並が間断無く形作られた。第6図の明治初年に作成された村絵図<sup>38)</sup>は、近世後期の町並みの様子を詳しく伝えている。

絵図中には、西に向かって徐々に町が拡大していった痕跡が、道の両側に対置された石灯籠と松らしき樹木に認められる。これは、前掲の第5図

において町並みの西端とされる場所とほぼ一致することから、おそらく文化期以前に建立されたもので、町の範囲を示す象徴であった。現在、石灯籠の一部分が、大塚金物店の中庭に残っている。新しく拡大された町並み部分の家は、全体に小さく描かれ、その間口が狭いことに気がつく。ここでの店は、近世末期から小鹿野の重要な産品になった薪炭やくず繭を扱う店舗や、より上流部の山間集落を購買圏とする穀物商や行商人、あるいは桐下駄や建具を製造する職人らによって構成さ





の小鹿野の景観  
図」より作成，原田洋一郎作図)

れた点に特徴があった。

上町から下町の旧町並みの区間には、2つの建造物が道路上中央に描かれている。このうち、下町横田権平家の前に位置するものは、描写の具合からみて高札場と判断される。もう一つは、上町と中町の境にあり、石祠であることから市神の天王社であろう<sup>39)</sup>。いずれも、この明治初年の段階には町並み全体からは大きく東によってしまっていた。

同じように、近世初頭の町立の時点では町並み

の西端であった十輪寺の位置は、相対的に町のほぼ真ん中となった。今に残る観音堂や時の鐘のほか、境内地には8～9軒、さらに町並みに面して10軒の「十輪寺店」がみられる。これらの店は十輪寺から店借りをし、門前において飲食業を営んだり、あるいは小規模な小売店舗ないし職人で構成された。

町並みの北側にあって、ひときわ屋敷面積の大きいのは、相名主の一方の田嶋家である。道からやや奥に入ったところに、間口の大きな家が描か

れているが店である。そして、その後ろ塀で囲んであるのが居宅であろう。屋敷地にはそのほか蔵や奉公人が起居する長屋らしき建物があった。この田嶋家は、寛政期には多数の抱人および下人を雇、酒造業をはじめ種々の商売を大規模に行っていたと見える。寛政3年(1791)の人数増減帳<sup>40)</sup>によれば、四郎右衛門は、播州加古郡北出家村から3人を抱人として雇っていた。

そして、明治初年にいたるまでに、町並みを構成する町家のほとんどが店で占められていたことは注目すべきである。その多くは店借りの形態を取っていた。原に拡大した町並みにある、長屋形式の建物の「柴崎佐平店」はその典型である。また、「某持」と記された町家は、大規模な商家が抱人あるいは下人によって経営した直営の店であった。

#### Ⅳ 明治以降の小鹿野の商業活動の変化と蚕糸業

##### 1) 小鹿野の商業活動の変化

安政の横浜開港以後、西秩父の経済は急速に拡大した生糸生産を中心に展開し、小鹿野は流通の結節点として重要な位置を占めた。小鹿野の町並みは、明治4年(1871)に戸数218戸、人口806人を数えた<sup>41)</sup>。翌5年には、新たに拡大した町並み部分を含めて、各町名が一括変更された。旧来の下町、中町、上町にかわり春日一丁目、春日二丁目、上一丁目の呼称が用いられ、新しく拡大した町並みは上二丁目と名付けられた。

第2表は、明治12年(1879)に作成された「諸商業人名及営業金商取調書」および「雑種業人名取調書」<sup>42)</sup>をもとに、明治初期の小鹿野における商業構成を表したものである。町全体で22の業種が記載されているが、なかでも営業人の多い業種は荒物商、雑穀商、饅頭商、太物商であった。米穀、或いは塩魚・乾物は、山間内陸に位置する西秩父にとっては必要不可欠な移入食料品であったため、雑穀商や塩魚・乾物商は、町だけでなく、山間集落を重要な購買圏として成立していた。14

名を数えた太物商は、小鹿野で近世以来盛んであった絹取引に従事した。また、饅頭商や温頓商は、それぞれ16名と13名で、茶店、または飲食店であった。これらは理髪業や遊芸などのサービス業と同じく、町や市へ来集する人々に対して飲食の便や娯楽などを提供したもので、小鹿野の中心性の高さを表している。

このほか、菓子商も10名を数え、小鹿野での消費生活の水準が高かったことを窺わせる。これに加えて近年まで、三峰神社の供物菓子が小鹿野で造られていたことに象徴されるように、当時から2名の「菓子卸」がいて、これらは広い商圈を有していた。青物商や豆腐商が商店として成立していたことは町に生活する職人や賃労働者などが多く、都市的発達が著しいことを示している。

さらに少数ではあるが洋物小売や書籍を販売する店があったことは、小鹿野が近世から江戸と流通において直結し、様々な文化を取り入れた西秩父の窓口であったこと、また、輸出生糸の取引を通じ、明治の文明開化もいち早く流入したことを窺わせる。

複数の業種を兼業する店が多かったことも、特

第2表 明治初期の小鹿野の商業構成

業 種	人 数	兼業している業種とその数			
温頓商	13	饅頭3			
饅頭商	16	温頓3	菓子小売2		
菓子小売	8	饅頭2	古器1		
菓子卸	2	雑穀1			
豆腐小売	9				
青物小売	2				
塩魚	7	乾物4	荒物3	雑穀3	書籍1 雑穀1
乾物	4	塩魚4			
古器小売	8	菓子小売1	古着1		
瀬戸物小売	2	荒物1			
荒物小売	39	雑穀21	塩魚2	洋物2	
建具小売	3				
桶小売	1				
下駄小売	3				
足袋小売	3				
小間物小売	6				
洋物小売	5	雑穀2	荒物2	太物2	
古着小売	10	古器1	饅頭1		
雑穀商	24	雑穀21	荒物14	太物13	塩魚3 菓子卸1 瀬戸物1
太物商	14	荒物14	雑穀13	洋物2	書籍1
金物商	1	雑穀1	荒物1		
寄附	2	太物1	塩魚1		
俳優業	1				
遊芸	3				
理髪業	2				
水車	2				

(「明治12年諸商業人名及営業金商取調書」及び「雑種業人名取調書」より作成)

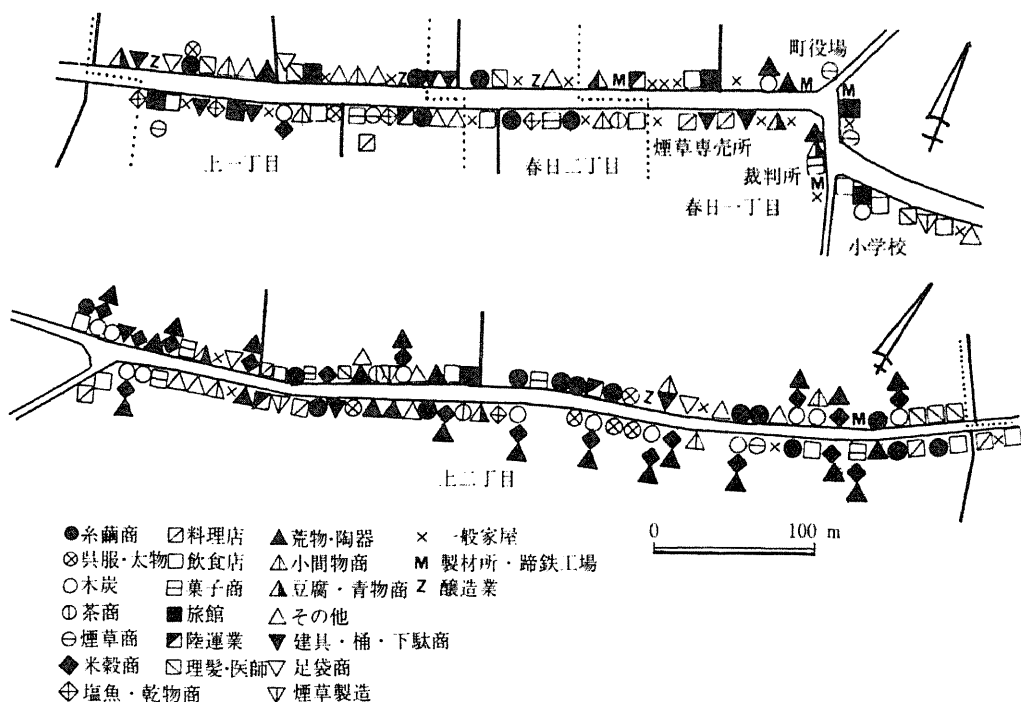
徴の一つである。とくに、雑穀商と太物商の兼業例が多い。このことは、商店の専門化が未だ進んでいなかったとみることもできる。しかし、兼業の経営形態は、絹や薪炭の集荷の仕組みと深く結びついていた。農家から製品を買い付け、代金として米・塩と交換することが広く行われていたためであった<sup>43)</sup>。

他方、輸出向生糸の生産の増大は、小鹿野の市に大きな変化を与えた。文久3年(1863)には、従来の六斎市に併せて糸市が立てられた<sup>44)</sup>。この糸市で生糸流通の集荷を担ったのは、拡大した町並みである上二丁目に定着した糸繭商人であった。彼らは養蚕農家から繭を購入し、自家製糸、または「釜屋」<sup>45)</sup>と呼ばれた製糸業者へ繭を委託して生糸を生産し、これを市へ売りに出した。市に出された生糸は、小鹿野の買い継ぎ問屋や東京の松坂屋や白木屋などの呉服問屋などによって買い付けられた。すなわち既にみた煙草市や絹市とならび、生糸も西秩父の経済の中核を成す商品

になったのである。

明治20年(1887)には、糸繭商の多い上二丁目へ市場を増設するように市場規約が改正された。これによって上二丁目は毎月五日に市が立てられることになり、六斎市日の残り5回は旧上中下の3町で交互に割り振ることになった。この市日分割は、生糸取引の増大を背景に、糸繭商を中心とした上二丁目の商人が発言力を強め、残りの3町の商人も、これを無視できなくなっていた状況を如実に物語っている。

明治35年(1902)の「埼玉県営業便覧」<sup>46)</sup>は小鹿野の町並みを詳細に記している。第7図に、当時の商店の配置を表した。糸繭商は小鹿野全体で19名を数えたが、このうち、14名が上二丁目に属していた。組織物を扱った呉服商や、米穀商も、上二丁目に集中していたことがよみとれる。さらに材木や木炭などを扱う業種や、飲食店や料理店といったサービス業者も上二丁目に多く、町の商業活動の中心が上二丁目へ移動していったことを



第7図 明治35年の小鹿野町の町並み  
 (明治35年「埼玉県営業便覧」より作成)

示している。

これに対して上一丁目、春日一丁目、春日二丁目は商店の数が相対的に少なかった。特に春日二丁目と春日一丁目はこの傾向が強く、商売をしていない家が多くめだつ。そのかわり、町役場や裁判所出張所や郵便局などの行政機関や小学校が立地し、また、近世に創業された旅館や陸運業者が、大きな町屋敷を構えていた。

このほか、上流の両神村や旧三田川村から運ばれてきた材木や薪炭を扱う店が小鹿野の町には多数存在していた。製板場や、桶商あるいは下駄商といった業種はそれに関わって成立した工場や職人であった。また、煙草商と共に煙草製造場や専売場が置かれていたことは、近世中期以来、小鹿野が西秩父の煙草生産の中心であり続けたことを意味している。

## 2) 西秩父の蚕糸業

### a. 明治初期の蚕糸業と小鹿野町

幕末の開港により秩父における生糸生産が急速に展開する中で、小鹿野は西秩父の輸出向生糸の集散地となった。小鹿野町の生糸商の一人であった加藤恒吉は、横浜へ生糸の売り込みを行い、輸出向生糸の販路を開いた。従来の座繰生糸は輸出向の生糸には不向きであったため、新しい技術の導入が図られた。明治5年(1872)10月、官営工場として設立された富岡製糸場の工女募集に、小鹿野からは23名もの子女が応募した。彼女らは最新の製糸技術に接し、約6ヶ月間製糸場で働いた後、小鹿野へ帰ってきた<sup>47)</sup>。輸出向生糸の製糸技術の進展は小鹿野を中心に西秩父諸村へ波及していった。

明治9年(1876)の秩父郡内における旧町村別の生糸生産量を第8図に示した。これによれば、荒川水系の諸村と西秩父諸村との間には、生糸生産のうえで明瞭な差異があったことが認められる。生糸生産量は下吉田村の486貫を最高とし、次いで420貫の小鹿野町、350貫の両神村で盛んであった。これに対して249貫の高条村のほかは、秩父町周辺での生糸生産量は全般的に少なかった。つ

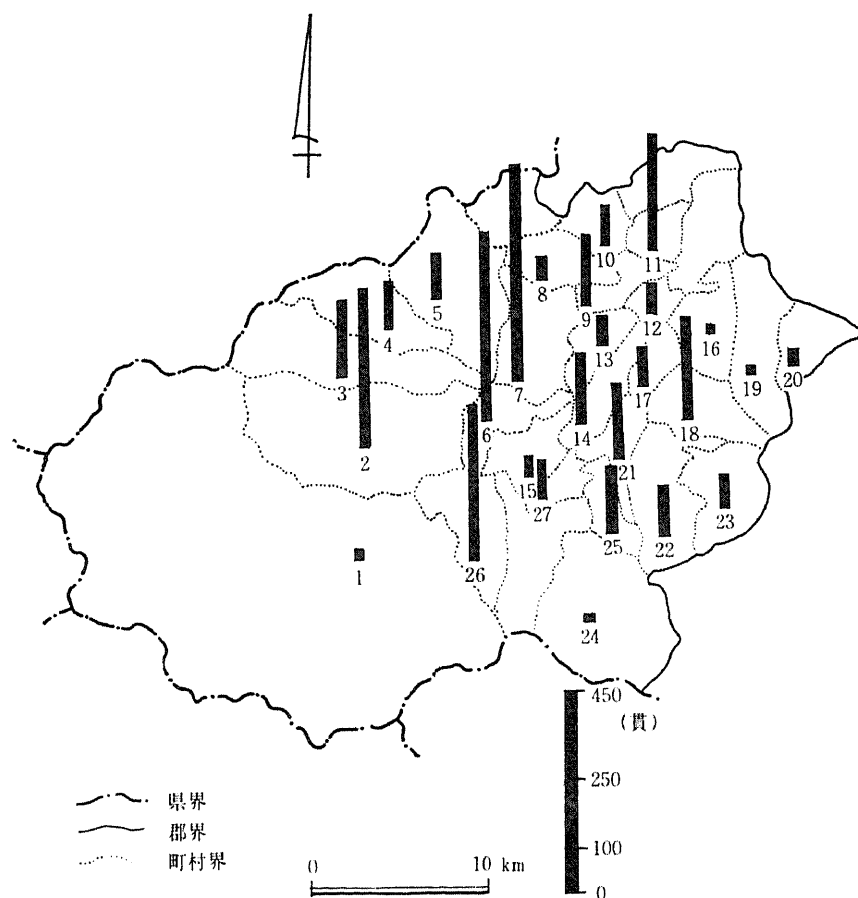
まり幕末以降明治前期の秩父盆地の生糸生産は、西秩父を中心に展開していたことがわかる。

明治12年(1879)の小鹿野町には輸出向生糸を扱う生糸商が8名存在した。第3表には、各生糸商が生糸改所から交付された印紙枚数を示した<sup>48)</sup>。最高は渡辺傳八で15万枚にのぼった。この渡辺傳八のように当時、横浜に販路をもち輸出向生糸を専門に取り扱った生糸商人は「浜師」と呼ばれた。そして、これらの生糸商はそれまでの「繭主一釜屋」という生産関係から脱却し、機械製糸場の設立を指向した。同12年には隣接する両神村薄に共精社が操業を開始した。共精社の創設には、小鹿野町から前記の加藤、柴崎、太田の3人が参画している。さらに翌13年には、小鹿野町にも鹿鳴社という会社組織の製糸場が設立された。これら機械製糸場は、生糸の規格統一と品質向上をめざし、西秩父における輸出向生糸の生産を促進を企図していた。

明治14年(1881)には八王子で殖産興業を目的とした共進会が開催され、栃木、群馬、埼玉、神奈川の4県から絹織物や生糸が出品された。このとき、入賞した生糸の過半数は埼玉県を生産地とし、なかでも小鹿野町や下吉田村から出品された生糸が多数を占めた<sup>49)</sup>。

しかし明治14年9月におきた、いわゆる横浜生糸荷預所事件は、資金面で脆弱だった地方の生糸商に大きな打撃を与えた<sup>50)</sup>。以後、輸出向生糸の流通は横浜の生糸商が主導権を握るようになり、地方の生糸商はそれに従属するようになった。銀行の整備が未成熟であった西秩父も例外ではなく、小鹿野の生糸商の中には、このことを契機に、経営規模を縮小ないし生糸取引から他の業態へ転換するものがみられた。

生糸取引の販路拡大と量的増加によって、新たに秩父盆地から外へ通じる輸送路を整備する必要が生じた。明治14年11月に本庄や児玉の有力者が中心となり、本庄から児玉を経て野上へ通じる新道の開削認可を埼玉県へ提出した。翌15年(1882)12月には小鹿野を中心とした西秩父の10ヶ村から同様の計画が埼玉県に提出され、この二つ



1 大滝村	4 倉尾村	7 吉田町	10 金沢村	13 大田村	16 三沢村	19 槻川村	22 高条村	25 浦山村
2 両神村	5 上吉田村	8 日野沢村	11 野上町	14 尾田薮村	17 原谷村	20 大河原村	23 芦ヶ久保村	26 白川村
3 三田川村	6 小鹿野町	9 国神村	12 皆野町	15 長若村	18 横瀬村	21 秩父町	24 久那村	27 影森村

第8図 明治初期における秩父郡内の生糸生産（明治9年）  
（『埼玉県蚕糸業史』48ページより作成）

第3表 小鹿野の輸出生糸商（明治12年）

氏名	引受印紙枚数	その他の職業
渡辺 傳八	150000	不明
村上 喜平	70000	太物雑穀荒物
井上 良介	50000	雑穀太物荒物
加藤 恒吉	50000	太物雑穀荒物
太田金四郎	40000	不明
黒田喜惣治	35000	瀬戸物
柴崎 佐平	25000	古着小売
相馬 国平	10000	不明

（柴崎家文書「明治12年生糸改所御用留」より作成）

の計画が秩父新道の原型となった。小鹿野町からの発起人には、柴崎佐平と加藤恒吉が名を連ねた。秩父新道は明治16年(1883)に秩父町も含めて全額地元負担で開削工事に着手し、明治19年(1886)に完成した。小鹿野を中心とした西秩父と本庄や児玉を結ぶ輸送路が確保された。

この秩父新道の完成に合わせて、明治19年に野上、秩父、小鹿野のそれぞれに駅伝組合が組織された。このうち小鹿野駅伝組合は、西秩父25町村<sup>51)</sup>の陸運従事者から構成され、その取締役には小鹿野町の柴崎貞七が就任した。第9図は、明

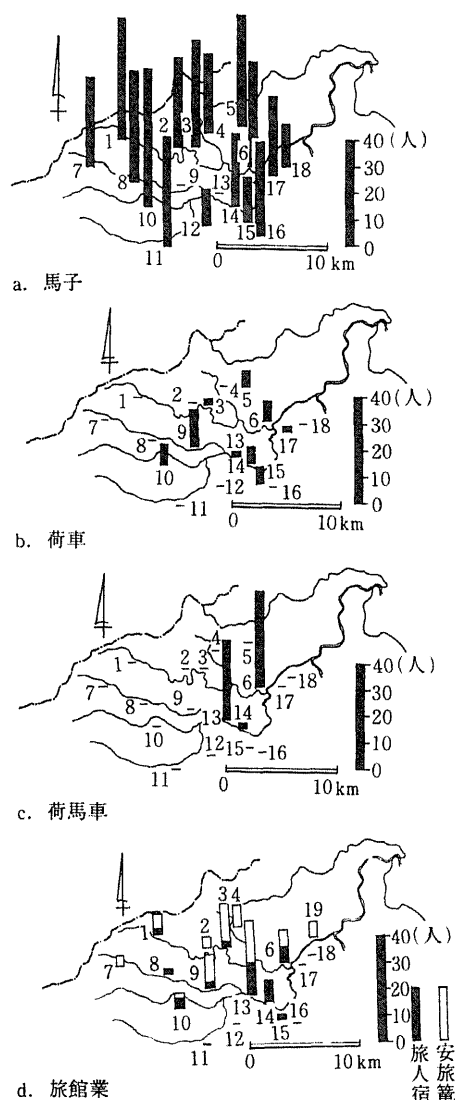
明治20年(1887)における小鹿野駅伝組合の組合員分布を示したものである<sup>52)</sup>。馬子の分布をみると山間集落ほどその数が多く、小鹿野の周辺は少なくなっている。荷車と荷馬車は小鹿野町や下吉田村とその周囲に多く、とくに荷馬車のほとんどが小鹿野町と下吉田村に集中している。こうした分布傾向から、まず各谷筋の物資は駄馬によって小鹿野町と下吉田へ集荷され、さらに移出産品は陸運業者の手を経て荷馬車に荷を積み替えて、本庄や児玉に向けて輸送搬出された体系がわかる。

また旅館業者は、赤平川や吉田川の谷筋の交通路に沿って分布していた。旅人宿は小鹿野や下吉田の市街を中心に谷口に立地し、谷筋の上流部にいくと安旅籠が卓越していた。安旅籠は山間集落を巡回する行商人などの拠点であり、群馬や長野へ通じる志賀坂峠や矢久峠などを越えるための宿として利用された。

#### b. 製糸業の変質と小鹿野町の生糸取引

明治30年頃になると、小鹿野の生糸商のほとんどは横浜との直接取引をやめていた。西秩父の製糸業そのものからも後退していた。明治26年には、両神村簿に組合製糸として改伸社が設立された。しかし、改伸社は両神村の養蚕農家と製糸業者を中心に組織され、小鹿野町の生糸商はもはや主導的立場にはなかった。改伸社は明治30年代には秩父郡の座繰製糸業者の約25%をその傘下に収め、特に西秩父においては製糸業者の大半を組合の傘下におさめていた。小鹿野の生糸商のうち加藤や村上などは、生糸取引や製糸業から離れ、明治29年(1896)に設立された小鹿野銀行の設立発起人となり、その後の小鹿野の商業金融や組合製糸へ融資を行うようになった。

明治32年(1899)の柴崎家の「生糸荷物出入帳」<sup>53)</sup>から、明治32年5月～12月間の生糸と繭の出荷量を第10図に示した。この8ヶ月間の出荷総量は約1万貫で、座繰生糸と座繰製糸が大半を占めていた。座繰生糸は各農家が製造した生糸で、品質の統一を欠き、おもに国内向生糸として流通していた。座繰製糸は改伸社の共同揚返場で生産

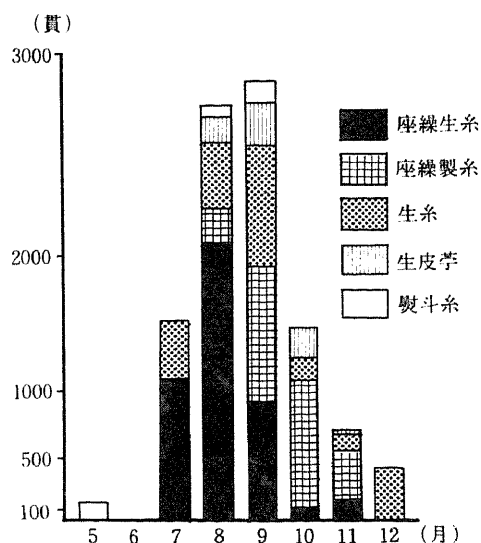


- |        |          |
|--------|----------|
| 1 藤倉村  | 11 小森村   |
| 2 日尾村  | 12 伊豆沢村  |
| 3 上吉田  | 13 小鹿野町  |
| 4 石間村  | 14 下小鹿野村 |
| 5 上日野沢 | 15 般若村   |
| 6 下吉田  | 16 長若村   |
| 7 河原沢村 | 17 太田村   |
| 8 三山村  | 18 品沢村   |
| 9 飯田村  | 19 野巻村   |
| 10 薄村  |          |

第9図 小鹿野駅伝組合員の分布(明治20年)  
(柴崎家文書「明治20年前期賦課金台帳」および「明治19年儲金台帳」より作成)

され、品質が統一されたもので、主に横浜に向けられる輸出向生糸であった<sup>54)</sup>。出荷時期は、8・9月に集中し、全体の出荷量の70%近くがこの時期に出荷されていた。送り主のほとんどは改伸社で、送り先は横浜や群馬の製糸業地帯であった。このことは、輸出向生糸のかかなりの部分が、小鹿野町の商人の手を離れ、改伸社によって行われていたことを示すものといえよう。小鹿野の生糸商は国内向けの生糸や繭の取引に比重を置いていた。

こうした生糸や繭以外にも、西秩父では山林の資源を生かした多様な製品が存在し、その多くが小鹿野を経由して移出された。第4表は柴崎家の「荷物出入帳」<sup>55)</sup>から、明治38(1905)～40年(1907)の荷物の移出入状況を示した。まず、西秩父からの移出品としては下駄、経木、屋根板、材木といった材木製品や漆、楮、煙草、柿、苗などが認められる。下駄は完成品の他に甲羅や朴菌など部品段階でも多く移出された。下駄の多くは両神村小森や大滝村などで生産されたものであった。また、楮は紙漉きの本場である小川方面へ出



第10図 柴崎家取扱いの品目別生糸出荷量  
(明治32年5月～12月)  
(柴崎家文書「明治32年生糸荷物出入帳」および三田村桂子の研究より作成)

第4表 柴崎家取扱いの移出入品目  
(明治38年から40年分)

品目		個数
移出品	下駄	6
	下駄甲羅	78
	下駄残木	8
	下駄菌	12
	下駄木取	12
	桐下駄	1
	桐下駄棒	1
	桐甲羅	310
	桐残木	44
	桐木取	28
	雑木下駄	2584
	雑木甲羅	6
	川下駄	12
	川下駄甲羅	12
	川下駄菌	3
	浜下駄	5
	苗	4
	煙草	60
	柿	2
	栗	87
移入品	黒栗	5
	漆	62
	楮	39
	茸	15
	岩茸	2
	茸	50
	竹	1
	木炭	31
	木炭	196
	櫛板	49
	経木	1154
	屋根板	93
	杉	71
	桶木	13
	木鉢	4
	板	1
	木材(桐)	46
	木材(桜)	4
	木材(杉)	1
	大豆	30
	豆粕	60
	麦	79
	米	262
	荷物	253
	食料品	125
	その他	142

(柴崎家文書「荷物出入帳」明治38年から40年より作成)  
注) 生糸・繭は専門の台帳が存在していたことから荷物台帳からは除外した。

荷された。他地域から小鹿野町に入荷していた品目は、米穀類や食料品、日用雑貨や衣料品を中心とした荷物類であった。

こうした多様な移出品目の構成は、西秩父の集落が山林資源を利用して複合的な生業形態を基盤としていたことにほかならない。

一方、東秩父では従来の生絹に代わって、明治中期から輸出向生糸と競合することのない玉糸を原料とした、国内市場向けの秩父銘仙が盛んになった。明治28年(1895)には秩父織物組合<sup>56)</sup>が結成され秩父銘仙の生産と流通が組織化された。こうした産業基盤の整備は、輸送手段の近代化を促し、秩父町の絹問屋や織物業者が中心となって、株式会世上武鉄道が設立され、熊谷と秩父盆地を結ぶ鉄道敷設が計画された。同鉄道は、明治32(1899)年に着工され、同34年(1901)には熊谷から寄居まで開通した。しかしこの段階では、まだ秩父新道が、西秩父と本庄や児玉を結ぶ糸繭の輸送経路として重要な意味を持っていたため<sup>57)</sup>、小鹿野の商人は、熊谷からの鉄道敷設に対しては消極的であった。

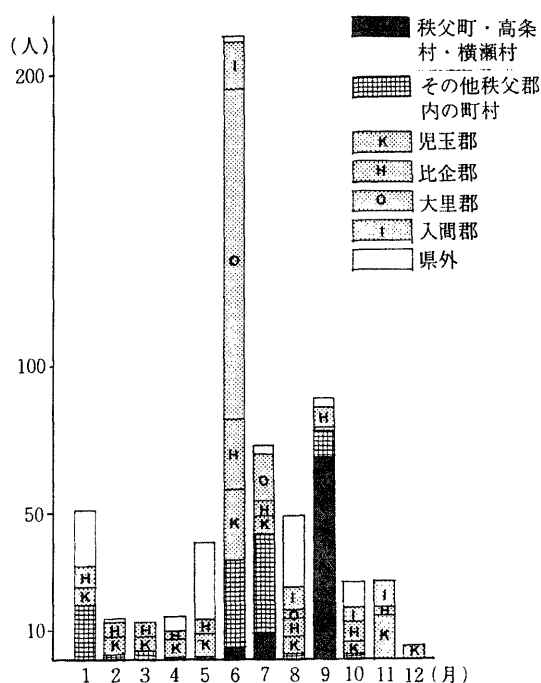
### c. 小鹿野町における繭取引の変化

明治末期から大正期にかけて、それまで群馬に基盤があった甘楽社や碓氷社などの組合製糸が、小鹿野を含めた西秩父に参入してきた。それらは資金や設備の面で優位にあったので、次第に西秩父の生糸生産のなかで勢力を広げ、大正2年(1913)には両神村の改伸社を解散に追い込んだ。これに対し秩父郡の製糸業者を保護する意味から、埼玉県が助成して埼玉社が大正7年(1918)に組織された。しかし機械製糸を導入しつつあった甘楽社や碓氷社の生糸は品質が高く、生産規模も大きかったため、従来の座繰製糸の技術ではもはや対抗しきれなかった。その結果、座繰製糸による生糸生産よりも、むしろ機械製糸工場へ繭を原料出荷することへ西秩父の重心は移動した。これによって、小鹿野へ多くの繭仲買人が買い付けに came。

第11図は、大正13(1924)年の須崎旅館の宿泊

帳<sup>58)</sup>から宿泊客のうち糸繭商をとりあげて月別の延べ人数を出身地によって示したものである。これによれば、小鹿野に繭を買い付けに来る繭仲買人は、二つの異なるタイプがあったことがわかる。ひとつは6月下旬から7月上旬の春繭の出荷時期にあわせて宿泊した繭仲買人で、ほとんどが児玉・大里・比企郡から来ていて、ほぼ5日～10日のあいだ逗留した。もうひとつは、9月中旬の夏繭の出荷時期に訪れ、そのほとんどが秩父町、高条村、横瀬村の繭仲買人であった。春繭は夏繭に比較して品質が高く、輸出向の機械製糸の原料に適していた。つまり品質が高い春繭は、本庄や熊谷にある機械製糸工場へ向けられ、やや品質の落ちる低廉な夏繭は、秩父銘仙の原料として利用されていたのである。

このように、小鹿野を含む西秩父が、本庄や熊谷の機械製糸工場や秩父銘仙の原料供給地に転化したことは、結果的にそれらの地域の産業資本の



第11図 宿泊台帳にみる大正期の糸繭取引（大正13年）

（「大正13年須崎旅館宿泊台帳」より作成）



影響を大きく受けることにつながった。大正15年(1926)には小鹿野銀行は秩父銀行に吸収合併されてしまい、さらに、昭和恐慌によって機械製糸工場の生糸生産が縮小すると、西秩父は秩父銘仙の原料供給地としての性格をいっそう強めることになった。

## V おわりに

近世初頭から昭和初期にいたるまでの、小鹿野の町の変容を以上にみてきた。町場が形成されて以来、小鹿野は西秩父における結節点であり続けた。そのため、町の展開は単独に進行したのではなく、秩父盆地をとりまく社会経済的变化や、西秩父における生産構造の変化が、町の動向を大きく左右していた。こうした変動の中に、本稿ではいくつかの転換期と町の変質を認めることができた。以下では、成果を要約しつつ課題を検討してみたい。

まず、小鹿野の重立衆が、いずれも鉢形北条氏に仕えた「浪人」と伝える、かつての西秩父の小土豪ないし土豪的商人で構成されたことは、近世初期の小鹿野の商業活動の特徴づけた。慶長初年の町立てに際して、代官は彼らに町への移住を奨励することで、旧来の勢力を掌握するとともに、彼らが保持した商業的特権や職能を積極的に活用することを図った。彼らは代官から屋敷を拝領し、連雀宿の権利を与えられるなどの特権が保護されたのである。つまり、徳川氏初期の直轄領の代官は、旧秩序の否定ではなく、むしろそれを利用することに施政の要点をおいたと考えられる。このことは、領内経営をより円滑に行うためには有効なことであったが、一面では中世戦国期の秩序を残存させることをも意味した。寛永期に、岩田忠左衛門と田嶋四郎右衛門との連雀の宿をめぐる争論は、特権を保護された旧秩序と、惣村を背景に自立しつつあった百姓に代表される新秩序との間に生じた、最初の摩擦であったと解せられる。

元禄・享保期に陣屋が撤退し、同時に割元名主職も消失する頃、新しく資本蓄積をもった人々が

町をリードするようになった。彼らは、絹や糸を中心に拡大しつつあった商品流通に積極的に取り組んだ。秩父盆地を超えて北関東での絹や生糸取引にまで乗り込み、江戸問屋や京都と直接のパイプをもった。彼らの経営基盤は、元文期になると一層拡大した。これにあわせて、小鹿野の市も旧来の「座」で構成された市場から、特産物の形成と流通の量的拡大を背景に、たばこ市や絹市など、特定の品目取引を目的とする市の設立がみられた。ここに、変質を遂げた町と市のすがたを見いだすことができる。

しかし、こうした流通範囲が拡大する経過や、秩父盆地内の流通の諸段階の検討がいまだ不十分である。さらには、いつ秩父盆地の六斎市場網が形成されるのか、後北条氏下の秩父における市場の所在などを具体的に究明する必要がある。

幕末開港によって、西秩父は大きな転機を迎えた。輸出向生糸を中心とする生糸生産地帯となったのである。生糸流通の結節点となった小鹿野には、生糸取引に関わって新興の商人層が集積した。彼らは、近世後期に拡大した町並みの上二丁目到店を構え、旧来の商人層とともに町を牽引した。輸出向生糸の生産と糸繭商の増大は、市にも大きな変化を与えた。明治20年に上二丁目へ市日が分与されたことは、小鹿野の町と市が生糸を中心に展開していたことを端的に表している。

しかし、輸出向生糸の流通機構の変容にとともに、小鹿野の生糸商は横浜との直接取引から後退し、国内向けの繭取引へと転換していった。大正期になると、西秩父から移出された繭は、品質の高い春繭は本庄・熊谷の機械製糸工場へ出荷され、やや品質の落ちる夏繭が秩父銘仙の原料として秩父町周辺へ向けられた。さらに、昭和恐慌を契機に、秩父町への玉糸供給が徐々に比重を増し、西秩父は秩父銘仙の原料供給地としての性格を強めていったと考えられる。

しかし、なぜ、西秩父がいち早く輸出向生糸生産に特化しえたのかについては、重要な問題ながら検討しえなかった。この点は今後の課題であるが、一つは、西秩父の山間集落が、林産物をはじ

めとした複合的な生業形態を基盤に据えていたことと関係しているように思われる。それらについては、後日稿を改めて検討したい。

## 付 記

現地調査の際には小鹿野町教育委員会山本正実氏からご教示いただくとともに、調査の便宜をはかっていただきました。また元小鹿野町誌編纂委員長須田博二氏には史料内容についてお教えいただき、史料閲覧には加藤録郎氏、田嶋健一氏、柴崎重子氏に大変お世話になりました。地元商店街の皆様には多忙の中をアンケートにお答えいただきました。さらに、予備調査の際には城西大学の田村正夫・小口千明両先生から貴重なご助言を賜りました。本稿をまとめるにあたり史料整理と製図には、原田洋一郎、篠崎雄一、砂押久美子、松杉力修、山澤学の各氏にご助力をいただき、また実習時には、川島裕子、熊谷明彦、中野正人(以上平成元年参加)中島新、栗橋真紀(以上平成2年参加)各氏の協力を得ました。以上記して厚くお礼申し上げます。

なお、本稿作成に際しては、平成2年度文部省科学研究費補助金(奨励研究A)「日本における定期市場網の地域的差異」(研究代表者:岡村治、課題番号02951197)の一部を使用いたしました。

## 注および参考文献

- 1) このように市日が順送りに構成されて分布する六斎市の集まりを指して、六斎市場圏、あるいは六斎市ユニットないし六斎市リングという呼び方がある。従来、秩父盆地の定期市場網は、そうした典型の一つと理解されてきた。たとえば、①豊田武(1952):『増訂中世日本商業史の研究』, 岩波書店。②藤木久志(1965):『大名領国の経済構造』, 『日本経済史体系2 中世』, 東大出版会, 235~276など。また、流通そのものに注目する立場から後北条氏領国の市場を検討した研究として、③藤田裕嗣(1987):『後北条氏領国における流通圏と流通システム』, 史林, 70-6, 73~113。このほか、秩父盆地をひとつの完結した市場網とみる考えに対して、近年では西上州と結びつけた市場網の見方が提示されている。④和泉清司(1986):『戦国期から近世初期における市の存在形態—上野国を中心に—』, 地方史研究協議会編『内陸の生活と文化』, 雄山閣, 175~206。
- 2) 小鹿野町加藤録郎氏所蔵、岩田家文書(町文化財指定)。ただし、現存するのは全12冊の内8冊であるため、以下で検討する地名は、村域全体を覆うものではないことに注意されたい。欠落している検地範囲は、現地での比定の結果、おおよそ町並みの南側の笠原から清水崖にかけてであろうと推定される。
- 3) 内務省地理局編(1884):『新編武蔵国風土記稿』(1972年復刻, 大日本地誌体系⑩, 雄山閣)。
- 4) 小鹿野町誌によれば逸見家所蔵の「天保6年7月渡辺家所有土地図」には、「此水汲人数十人程有、一人八文ヅツ我方エ取り来ル処、天保元年七月中、下丁惣右衛門エユズル。其ノ後同人方ニテ取、我ガ田エ水引事勝手次第」と記載があるという。こうした溜井は、祭礼屋台にもちいる櫓の心棒を浸すことにも利用されたくらいに、清流で水量も豊富であった。小鹿野町誌編纂委員会(1976):『小鹿野町誌』, 462ページ。以下では『小鹿野町誌』と略記する。
- 5) このほか、段丘崖で区切られた砂礫平坦地を、牧あるいは馬囲いに利用した可能性を今後検討する必要がある。小鹿野における牧の実態については不明であるが、小鹿野において古くから馬の飼養が行われていたことは確かで、例えば、享保11年に小鹿野の馬喰五兵衛が吉田4名の馬喰とともに、大宮郷の馬市へ農耕馬の商いに出かけている。秩父市誌編纂委員会編(1962):『秩父市誌』, 364ページ。以下では『秩父市誌』と略記する。
- 6) 稲村坦元編(1971):『埼玉叢書 第五巻』, 133~136。同史料は前半部分を欠いており、また年次も不詳であるが、寺社の由来や家の系譜を知る上では貴重な内容を有している。以下本稿では単に「古老覚書」とする。
- 7) 岩田家文書。同史料は年次表題ともに欠いているが、書体や記載内容から天保期の作成と推断される。「小鹿野町由緒書」は、本稿で便宜的に付した表題である。以下では単に「由緒書」とする。
- 8) 「上宿」「中宿」「下宿」とも呼ばれていたようである。現在の町名では上一丁目、春日一、二丁目に相当する。
- 9) 岩田家文書、「武州秩父郡小鹿野上郷御検地屋敷帳写」。同史料は墨付21枚に屋敷149筆をとどめ、一筆ごとに間口奥行と面積および永高が記載されている。屋敷合計面積は5町6反4畝6歩、その永は6貫751文である。ここでは字附記載のない屋敷を「町分」の屋敷として取り扱った。なお、この屋敷帳では間口と奥行の記載に統一がとれていない。一般には町の通りに面する長さを間口とし、それに垂直する長さを奥行にすると思われるが、次左衛門の屋敷のように「23間、4間」と記されたものもある。以下では、間数の少ない方を間口

と判断して分析を進めた。

- 10) 「由緒書」は陣屋の移動を、「小鹿野町町場に相成、御公儀様より御陣屋御取立被遊、下町はづれ南裏三拾八間四方に御取立有之候。其後町中程江御引被遊、北町裏四拾間四方に御取立被遊候」と記している。北町裏に移転後の陣屋は、元禄11年(1698)作成の陣屋絵図とその敷地の一部を借地する証文が吉田家文書にあることから、少なくとも元禄期までは存在したことがわかる。しかし、代官の在地支配を廃止し給米制に改める幕府方針によって、各地の代官陣屋は元禄期以降に多く撤廃された。隣の下吉田村におかれた陣屋も元禄期に撤退したらしく、その跡地を同村の縫右衛門が元禄10年(1697)落札している(『吉田町史資料編 第一輯』)。小鹿野の陣屋についても、享保年間には引き払われたと考えられる。
- 11) 前掲6)「古老覚書」。
- 12) 慶安5年の検地は9月に作成されたのであるが、小鹿野明神は除地の対象にあげられていない。このことを「由緒書」は「御縄ノ時節に引故除地ハ無之候」と説明している。このほか、慶安検地において除地が認められたのは、次の寺社であった。諏訪明神(九畝拾二歩)、十輪寺(三反八畝歩)、地藏堂鬼王堂(八畝歩)、梅昌寺(四畝歩)、孤峯庵(五畝二歩)、山蔵坊(二畝拾八歩)、常光寺(二畝六歩)、諏訪明神欄屋敷
- 13) このうち、慶長2年とする考えの典拠は明示されていない。また、慶長12年を市立起源とする考えについても、岩田家文書の中で、おそらく包紙であったと思われる断簡紙片に、「慶長拾二年二月五日に小鹿野村ノ市六才定マル始ル」とあることを唯一の典拠としており、その文書記述が当時何に基づいて書かれたものか不明である。
- 14) 岩田家文書。このうち、「一札之事」には同内容の文書が他2点ある。
- 15) たとえば、武州比企郡松山町の市や高麗町の市、あるいは西上州の富岡、鬼石、万場の市などがあげられる。前掲1)④のほか、伊藤好一(1959):江戸時代の市場の発達、歴史教育、第7巻11号、27~33。など。
- 16) 小鹿野町田嶋健一氏所蔵、田嶋家文書(町文化財指定)「午ノ歳小鹿野村御年貢請取事」。
- 17) 岩田家文書、「乍恐以書付を申上候事」。同内容の文書が相手方の田島家文書の中に一点存在する。
- 18) 大里郡寄居町新田実氏所蔵(埼玉県編(1980):「埼玉県史 史料編6 中世2」付録に所収)。
- 19) 前掲17)。
- 20) ここにいう「座」は、中世の座の名称だけの名残であり、この時代には市に「見世」を張る営業権を意味する。こうした近世初期における市場の実態については、前掲1)④に詳述されている。
- 21) 四郎右衛門の町屋敷は、前節でみたように、慶安検地の時点においては町屋敷の中では最大面積を有していた。田畑の所有面積も多く、吉田家とともに相名主の一方を勤める家柄であった。そして、酒造業を近世初期から営んでいたらしい。市における座が制定された寛永期には、すでに常設店舗をとまなう商業経営を行っていた可能性を考慮しなければならない。つまり、小鹿野の市は近世初期において「市庭」の見世に並行して、後に「定見世」と呼ばれる常設店舗が出現していたことも考えなければならぬ。
- 22) 町屋敷間口に4間ないし8間間口が多いのは、逆に、こうした「座」が前提となっていたとも考えられよう。
- 23) 柴崎重子氏所蔵、柴崎家文書(町指定文化財)、表題欠。同史料には正徳年間の記述も見られるが、前半部の破損が著しく判然としない。
- 24) 現在の群馬県多野郡上野村周辺を指す。
- 25) ただし、享保13年の店卸時点では、在庫分58貫800匁6両2分2朱700文相当のたばこが計上されているから、重要な移出品に成りつつあったことは間違いない。
- 26) 漆については、寛保4年に「江戸に有 未年漆四桶四十両三分毫貫十文」とあり、大豆は寛延3年に「辰年かい大豆三十四表江戸有十八両貳分四百廿貳文」とある。
- 27) 柿原謙一(1936):江戸における秩父絹、埼玉史談、7-5、315~327。
- 28) 柴崎家といせや太兵衛との取引は絹に限らず、江戸へ向けた品目の大部分を扱っていたようである。それゆえ、店卸帳に記載される未決済分および手形貸しの金額は、いせや太兵衛に対してのみ突出した値を示している。例えば、最も金額が大きいのは、柴崎家の絹・糸の取引量が増大した元文5年で、194両600文にのぼっている。
- 29) 「店卸帳」の享保15年有質ノ覚には、柴崎家から竹平の多兵衛に宛てて「三両かし 京より糸仕切参次第迄」との記載がみえる。登せ糸の生産と流通が山間集落に渗透し、その決済は京から来訪する糸仕切人によって行われていたことが窺える。
- 30) 「寄合」の実態についてはさらに詳細な事実分析が必要であるが、ここでは次のように考えた。なぜ、「寄合」う必要があるかを考えるとき、そこには資本強化や危険分散といった経営上の理由が存在したことは否定できないが、むしろ当時の問屋の特権の存在を考慮することが適当であろう。つまり、糸取引権利を有する商家に出資し購入しても

- らい、売上利益を配当する仕組みである。ただし、ここでは柴崎家がそうした特権を有していたかどうかかわからないため、断言はできない。
- 31) 田嶋家文書「為取替申規定證文之事」。
- 32) このような構造は、当時の絹市と同様であったと思われる。大宮の絹市の具体的な様子を表した宝永6年(1709)の市掟が参考になる(『秩父市誌』, 349～352)。
- 一、絹市之事、朝五ツ時より市場<sub>出</sub>、売買可致之事。尤うちにて売買申事無用、若売買候ハ其絹定使方へ取上候様に相談申付候。右之絹売手買手両損。
- 一、絹買之儀、ゆたん壺つに銭五文ツツ定使方へ毎市宿之面々より相心得可渡之筈、相談相定候。當地せり共に絹買に出候分ハ五文宛可出候。
- 33) 『秩父市誌』, 360～361。なお、秩父における農間商人の生成と実態については、次の研究に詳しい。
- ①八木橋伸浩(1986): 秩父郡における近世後期の香具師集団, 地方史研究協議会編『内陸の生活と文化』, 雄山閣, 248～278。②飯塚好(1989): 秩父の商人・職人覚書, 埼玉県立博物館紀要, 16, 75～92。
- 34) 『秩父市誌』, 355ページ。
- 35) 大宮郷の市場議定に設けられた以下の箇条が小鹿野と同様の状況を表していると考えられる(『秩父市誌』, 352～353)。
- 一、市場之町内、平日ハ内見世、外見世ト二並之外、商人堅差置申間敷候。尤物前市格別繁昌之節ハ往來差障に不相成候様、中見世も立可申候。
- 一、市場之外他町にて商人共江決て見世貸申間敷候。近年定見世と号、月六齋に壱ヶ所にて見世極メ貸渡候族も有之趣相聞、不束に候。自今ハ市場町内にて貸渡、他町にて貸申間敷候。左候得ハ、三町に定見世月々式度宛無甲乙相廻し候。
- 一、雨天之節は外見世難立候付、市場町内軒下に商人共差置、居余り候ハハ商人共難儀可相成候間、他町之軒下に差置候共、是ハ相互之事候付、勝手次第之事に候。
- 一、□□共草履等売来(候)場所ハ、市場江不入受様場末<sub>江</sub>立候付、他所江流込候て茂不苦候事。
- これによれば、市場は町屋敷の「内見世」と市庭の「外見世」の2列から構成されており、さらに両者の間には中見世が立つこともあったことがわかる。「内見世」は本来市日ごとに各市場町内の屋敷を借りて営業することが原則であり、そのうちある商人との間に特定の貸借関係がなり立っているものが「定見世」と呼ばれていた。そして、「定見世」が市日ごとに移動せず、固定店舗化しつつある現状が問題視されている。
- 36) 田嶋家文書「為取替市場規定之事」。
- 37) 田嶋家文書。
- 38) 田嶋家文書。
- 39) 現在、出浦家の屋敷前に鎮座する八坂社の石祠には、寛延2年(1749)の銘が刻まれている。享保・宝暦期にかけての町と市の繁栄をもとに、市神祠の改築がなされたものと推測される。
- 40) 田嶋家文書、表題欠。
- 41) 「家並連櫓櫓比幅轡地調」(『小鹿野町誌』, 519～520)。
- 42) 『小鹿野町誌』, 514～519。しかし、「諸商業人名及営業金商取調書」には、当時の重要な商品であった生糸を取り扱う糸繭商をはじめ、旅館業者や酒造業者などの記載がない。したがって、当時の小鹿野にあった商店すべてを網羅しているわけではない点に注意しなければならない。
- 43) 聞き取りによれば、大正期にいたっても木炭と米穀・塩などとの交換が行われていた。
- 44) 埼玉県蚕糸業協会編(1960): 『埼玉県蚕糸業史』, 453ページ。
- 45) 前掲44)によれば、近世後期から明治初期にかけて、小鹿野を中心とした西秩父では、糸繭商が繭を集荷し、これを製糸業者へ委託して生糸を製造し、再び糸繭商が買い戻すという生産形態が取られていた。このうち、糸繭商を「まゆ主」、製糸業者を「釜屋」と呼んだ。
- 46) 『小鹿野町誌』, 525～529。なお、「営業便覧」に記載されている商店は合計177軒で、そのほか商店名や業種の記載のない家が24軒、および役場などの公共機関が載せられている。
- 47) 前掲44), 454～455。
- 48) 柴崎家文書「生糸改所御用留」。
- 49) 入賞した生糸のうち、秩父郡内の出品地をあげれば、小鹿野町、下吉田村、薄村、日尾村、大淵村、皆野町、岩田村、野上町、矢那瀬村、大内沢村の、11町村であった。
- 50) 横浜の生糸商原善三郎、茂木惣兵衛らが外国商人より生糸貿易の主導権をとるべく、三井などの市中銀行の援助を得て横浜連合生糸荷預所を組織した。横浜の生糸商は荷預所を通じて、生糸の直輸出をしようとして外国商との間で対立が生じ、この結果70日間にわたって、生糸取引が停止した。
- 51) 小鹿野町、下小鹿野村、伊豆沢村、般若村、長留村、下吉田村、久長村、阿熊村、上吉田村、石間村、大田部村、飯田村、三山村、河原沢村、藤倉村、日尾村、小森村、薄村、中津川村、伊古田村、太田村、品沢村、堀切村、野巻村、上日野沢村、以上25ヶ町村で構成された。
- 52) 柴崎家文書「明治19年儲金台帳」および同「明治20年前期賦課金台帳」により作成。なお、同史料

を用いた研究として次の論文を参考にした。三田村桂子(1989)：近代における西秩父の物産－運送業からみた物資の動き－，埼玉県立博物館紀要，16，52～74。

- 53) 柴崎家文書。および，前掲52)69ページの表13を参考にした。
- 54) 改伸社が扱った生糸は，農家から集荷された座繰生糸と，一度揚げ返しを行った座繰製糸の2種類があった。
- 55) 柴崎家文書。および，前掲52)表10～12を参照した。
- 56) 秩父織物組合は，秩父町の有力な絹買継商や機業

家を中心になって組織した。同組合の指導的役割をはたしたもののなかには，柿原萬蔵(絹仲買)のように，上武鉄道の設立においても指導的立場を発揮したものが多かった。『秩父市誌』，533～538，557～563。および，梅原貞康(1937)：『秩父織物工業組合史』。秩父鉄道株式会社(1950)：『秩父鉄道五十年史』。

- 57) 当時，本庄は埼玉県北部の生糸と繭の集散地としては最大であった。前掲44)。
- 58) 小鹿野町須崎宏氏所蔵「大正13年須崎旅館宿台帳」。